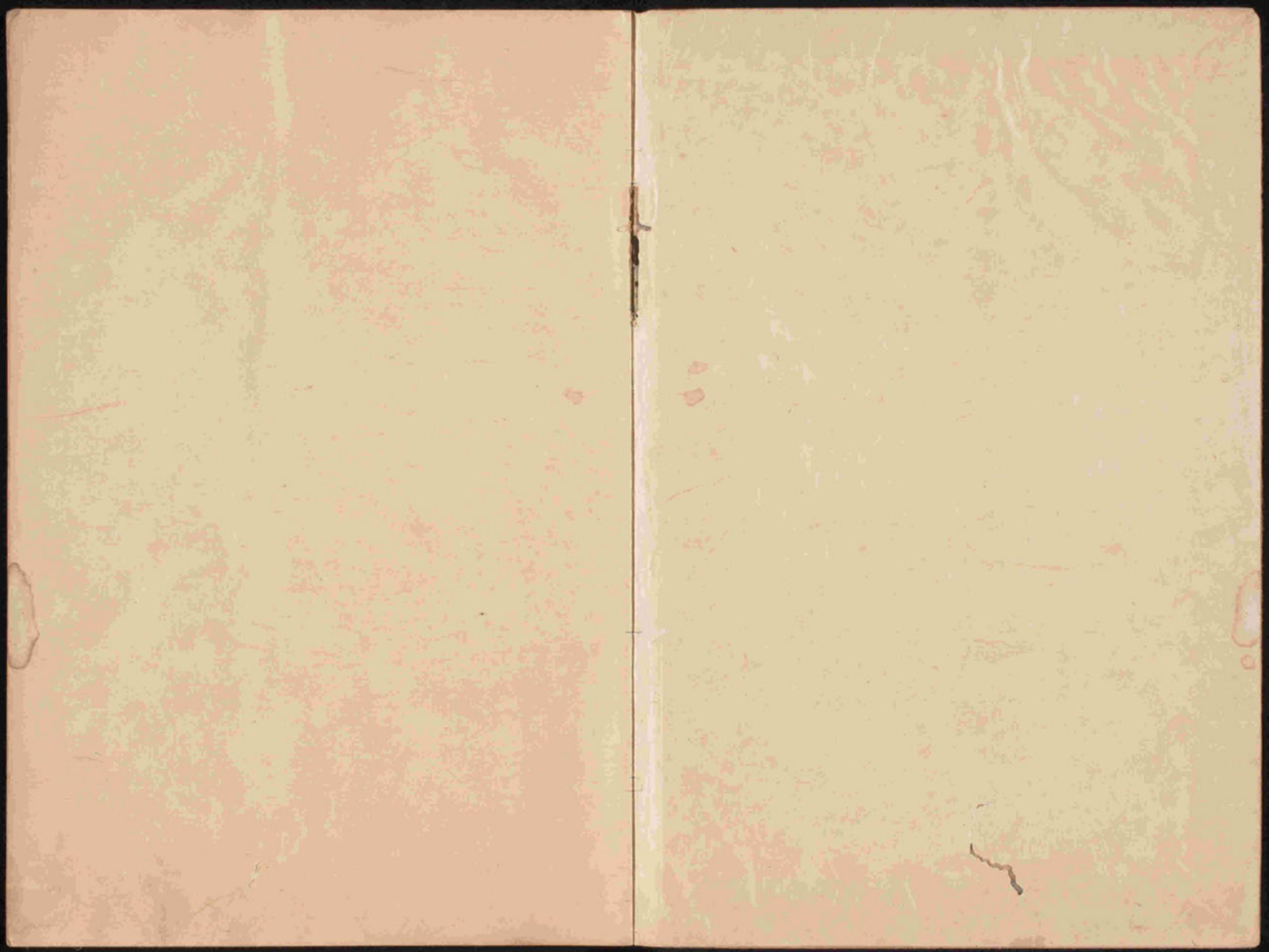


金葉和歌集



金葉和詩集卷第一

秋

春序

堀河院御は直ぐ尋めけふはるの

そとみゆけり 修理大夫船李

うらきよき君いよけましげのとも乃もくやこ

春宮大支公實

春宮大支公實

後承郎仲朝

川口と明やくえ乃すりあま戸あや春生也

皇后上官肥後

はねゆげする春川乃けり水よりても是乃

百々の春乃中上春のじく人よがりてよ

前舟官河内

春乃くらよのまわしのいふれけむやくにても是乃

初春乃つとよえり 太宰大蔵長實

川口と春乃上すとよめりやうをのゑに霞すりま

ひ月の日うち雪乃ふとよけむけむ日じりり

はだ木文郎季

ゆき年のりう。やうけどり雪じとよみ

ゆ

春宮大支公實

朝戸あけみちのすと乃雪みれ初もよやひて見
實りての家の尋たゞ霞のじゆよえ

少将教母

あきやみれむえ乃よもやさんひのよし考と毛臣

藤原院輔朝夫

年かようかもの差れこみりに乃くよす坐

霞のじゆよし
霞の

李事大貳長実

ありうち考乃よしめよしといふて下る霞霞の

白と乃平中す言ひのじとよえら

修業太丈院季

寫乃あくにいげみやぬみるくきのよしを一見

初聞寫じつぶせキトヨモス

春官太丈の實

よもや梅乃へりそし官のじゆ黒すりりもす見

月の日春立けり日官乃あけびくさみ

ええら

後承院輔朝夫

ゑやく雪くらしけぬ寫乃もこしよしとりもす見

あつうくらしきもとさくこづきましとよえら

源雅魚朝夫

寫乃けりくとぬとゆりきりま一多切とてみを

皇后宮よりめぐらへすりゆくぬりよ申

寫さりまとむる 源後頼朝

春氣もあらじれど寫乃おまづかせゆとのうゑ
良選は跡をひきのくにわけと左大辨
絶れう家のじえうわにまよひ代ハ門ノ
えひとすはみちくとみタスシヒ神
かとけ

良選は

梅乃も匂あやまと生じてそくく通せんくの籠
梅危^薰危^薰こくろくとくふゆえ

高太宰久成長房

梅えもんや吹くじ香のよゆゑ他之よりくちづ
朱雀院正人く風うて周遊梅もごくつ
まばとも

大納言経信

うじにみこすと梅危^薰危^薰や香の風よくほ
道雅卿家^哥方ト梅危^薰とよも

高太宰久成長房

ちうづふけいみや株^木に梅危^薰水^水うそくいあら
梅危^薰とよも

源忠季

限わざやしり、そりごと樹^木の危^薰、梢^木の^木とよも
子日^ひとよも 大中^{ちゆう}長朝

乍ら乃の日ねにえとて秋をかしらふれ
百之尋の中よす日乃にゆまも

大長郎は房

春霞みりつゝと姫ねむるの（）我事は
柳絲隨（）（）（）

院印製

風吹柳のゑ乃むすがよしにけりる春小
百之尋の中よ柳とよもも

春吉全史の寔

わよふ吹く風をそひよしけり柳

比鳴柳とよもも

源雅重朝

風吹け波乃めやまは木下よもも春の雪柳

よももとよもも

前井尻尾張

さよくる木下よもも春の雪柳

霞中波音といづれ事とよもも

藤原成通朝

春霞金引よももとよもも

波音とよもも

安原経通朝

今にてすうちにゆゑをとらねどもややりがひ
危鬱夙ごいづらばよもむけ

持改ト大モ

の野よその梯ア壁也しもあさしの里に有る
白河の危えの印事よ

モト

新内印製

ものいふ者をやれどもつりもまづ盛よ向へり

義人モ

白川乃すれども宿され危のありてのけ幼

人よがりてよゑ

今寧久貳長寅

吹風ともうあくまじきよもとけの考くわい
御賢門にむきあ

万木ノ葉々こみす花の色をうらうめりの秋

源雅魚朝丸

年少ト嘆す宿のとくに危むれくまへ喜うゆつよ
宇治あをぬ大良、京松家ノ印事のむすび

りけん
院印製

考覧めちづく曾見もすすき危の匂いもひま見え

遠山梯といふ字とよゑ

春官大夫の實

白毛ごときう乃くうひのすりもひよしす様

右同様危ごつてすまとよを今

日食

唐ゆよねみごとくうけにれて凡よよきれと危極る

左共は皆実能

シテ事うりてし匂くまゝに秋うへすねのまゝ

右寒毛毛までりふ

左京左史經也

山鷹ますもの見乃くしけれ危の急にあうり

新だのぬつてはニキ危與迎年ごつてすまと

すまと

徐賢門院中納言

白毛とぬくさの精毛とよくとや考とぞり

左京左史經也

万代すみすみ危のえられいのうのうしりと

経日尋危ごつすまと

源貞輔朝ト

白毛にはくさくとよいとてかくらぬよなわにト

堀けんの附せ房へんを危ふの危ふと

うりゆかげよかうてぬりてひありく亭

にうまいだけのせ處にたりてより身分

うけ

堀切市内製

ちふ生て、生て、危て、危て、あら小峯の橋下さう力す也

源師後朝代

多言あらずと云ひし橋危てあけ事のゆゑ

山危を既ごりて、山危を既ごりて、山危を既ごりて、

李寧大貳長實

り山危を既ごりて、山危を既ごりて、山危を既ごりて、

山危と、持歎た大良

奉りて、山危を既ごりて、山危を既ごりて、山危を既ごりて、

人、山危を既ごりて、山危を既ごりて、山危を既ごりて、

山危と、持歎た大良

梯危既ごりて、山危を既ごりて、山危を既ごりて、

宇治危を既ごりて、山危を既ごりて、山危を既ごりて、

皇后宮持歎

ちゆくすをきすをきすをきすをきすをきすをきすをきすを

源後朝代

山橋笑ひて、山橋笑ひて、山橋笑ひて、山橋笑ひて、

危て、春かこどもすがよしよしよしよしよしよしよしよ

りい食

ちうもまひ危をぬまひ可也下孝すわ後ゆる多トト
遙見山危ごりづらまばよみる

人麿マ追房

物としやすみの危乃笑也れいえのけあうづくもす

安永忠隆

う野山よりよきすむらもとみやう危の柄すゆり

「山危山人」ことふまことよしも

（太中）信る長朝

きのえまほりて是やねあう孝としらは偶やうと
堀河市内は市内のみの女房わすれ危み

やうしけりよめ

筋舟官流乳母

者くくわう思匂いを偽危いがれのやぬまほ

人よりかてよもよ 墓の行

ようりて、やすきじもんをぬぎてはえてもゆき
後冷泉院の内くも皇后宮のすなまくくは
よもよ

堀河市内

考歎よめせゆくつは山偽ものづーのや
月床危をすくよひとばよみる

人麿マ追房

月既に危すらま乃うにやれのつゝにゆうすあり

歌季での家りくそくへうたまくよ

すもせかせけにゆうえ

太宰久貳長寛

春乃日のしけくえよあう雪月よみうら花見を経
氷上簾泡こいつて事とよえ

源雅典朝

花まくわくやまとくらむし桜まくら春河の泉
清泡波底こいつて事とよえ

左吉清實作

けみせがくの風はうり墨で夜しき危へうかぐれ
堀町花門は中宮の内方坐て凡静花房田子の音
いづきをくわくわくわく

源俊賴朝

こまくわくことくわくは偶たかりうけのよす

落むのふくろく 長寛

考めよかく梅乃花れやじくといひくはく
落花隨風

左吉清實伊通

くわくわくわくわくわくわくわくわく

水上落危アシタカごとくちかくあらう

大幼言經信

水上落危アシタカごとくちかくあらう

後承成通アシタカ朝丸

水落危アシタカごとくちかくあらう

落危アシタカごとくちかくあらう

後承成通アシタカ実

中官落危アシタカごとくちかくあらう

春ト乃ヘ取リけりに由リムトテトヨ

かけ、 高階経成朝

さく候ト向を以テモトヨのあらずアモトモシ
モトヨシナム。 右吾馬皆伊通

白毛ニ奉はシテ偶花ちれいあとの雪ニシテ
後令泉院^院月月アリヤケルモ也尼^ニモ
シテ南殿ニシテと行ひカケルモ也の尼
カリナリカタニカタリうりけ^リキ御流^リナ
ミセス^ストムシノトヤシカトキアマモ
ミ申官の内^シトヨト野ヤウジテサニウ
けたけ^{タケ}トメ^{タケ}トメ^{タケ}

下野

すれよ月のうちみわと、やのの庵を以テやほ
新^ハ月^ハ御^ハレ^ハシテ^ハモ^ハ偶花^童開^ハリシテ^ハモ^ハ半

トヨシム 中納言雅之

ちうてお花乃ありふかすめざしを見え^{シテ}みよ
かく^{シテ}みく^{シテ}百^ハうよけ^リ一^ハ見^{シテ}みよ

よゑ

枕僧の歌集

山里のものよりいと生ちやうじのむかへるひれ
百川の平中日杜若と

修羅大夫歌季

東路乃下やうむすりあはりとくさりと笑ひけり
春の田とよき 大納言経信

わとゆほと若月と風とれりとよひよわにとく

よゑ

唐も国基

鳴乃から野澤の小田をすげりぬよびて翁もせりて高
は冷泉院の西は江徹殿の御のうなよ苗代と

よゑ

後醍醐天皇

山里の水面のとおなりうつも月の水とうつ也日うつま
家乃とゆそんくわうくゆうてとくわうく
けうゆわうけうとみくわうく

中納言雅室

ワ、宣文もとくうりうやうやうやううと山吹のじふ

木遣歎みと

持取たんを

限ありうめうめうやよつ吹といめくわううすいのう
かくしゆも

今事大貢長実

春あうむねむけよまうやううううううの危

後冷泉院印はすすり山吹をよもる

前太宰久貞長房

山吹に吹く風のやさしさをやうやくらし
夕の山吹をすこしいづけよめら

晚思跡

持改た久也家冬月

入日とヒメ紅葉のまじゆかへ、堅りおけいふ
院のね面よて橋上夜危といふまをよめら

大丈典は

色のぬけよまつて東路の橋よりふ夜危
藤花とよむち 夜原の肺朝

此葉乃るあわゆる夜の危づれねむじいきよ小
坊の夜たきわむけりとみくよめら

律師増賞

多く人トやれ我宿の夜も誰せよりこみゆつ見
紫藤歳ねごいづまとよめら

良置は師

背負ひととさりと夜もとをすりて地う危とよめら
二重園の家りくに遇夜危ごとくすを

よめら

久納言行信

けいじねのともえの葉のすわりくら夜喫ひ

百三乃平の中は夏もをとる

修理本支引李

佐喜乃ねよりれらの花風のよわよあこややうし
氣中夏花ごりへうとくばよめ

神祇臼於仲

タタラアモリカケマキ風よまよひ夏花くこ風
隣家夏花ごりへうとくばよめ

田人た家越後

芦子乃歌といみせじ夏のむ匂いがとへきてさけま

盛綱母モ盛宗

も乃やまやう春のううてあやの下にちうゆに
三月畫のくべよゑ

大僧都釐觀

きのゆく通よきしフ鵠ホウつゝねしすとやじよき

中納言雅空

のくとく書い春をやしそれしやくよけくじく

三月畫あのことよゑ

日食

春や人今やこのじれ見じとく

重服にゆけまう三月畫ハクのすとく

清官ニシテは止けれり

友京殿晴朝也

黒やれ矢くわゆ、
了考みよと立ナツイツキ。あと
持取大屋家生ミム人々。三月畫のノダヨミ
とゆ止けり。

源俊賴朝也

アラ考う月乃ミヨアニコウス

ホリノアモ此の御まえ

全葉和詩集卷之第二

夏序

夕月乃り、みちの日、
カレ

源師賢朝也

秀ミテ、アラシメ、此也文衣をアヘテ考セヤシカ
ニホノ家ヨリ、人ノ波危の心をよまん

ルケリ、よもん、友京風房

夏ノテ、アラシメ、此也文衣をアヘテ考セヤシカ

應德元年四月三日、内裏より庭樹絶縁

アラキトヨモセテ、

院内製

きよるふ柳リヨウが併ハシせたり葉代ハタケの聲こゑとわせあは

人納言經信

玉柏ミヤマツをともひつゝ歌うたけましやかカニ書シムみハシれまし

鳥トリを生アゲて人ヒトうじりウジリ廻アラシりつけツケよやむの
いふよだら

春官ハラシを支シる實

雪ゆき乃ノまマをうしりウシリて下アシけケるの危クレバよすの黒クマへきヘキこかむ
夕ハヤシ危クレバ連ツネ坂ハラフごくゴクすをよえら

大オあアてほホ居ル

りれをつツくクやヤすスよヨ山サンの坂ハラフびつきに下アシけケるのも

知チ危クレバよヨうウ 江エガ城シ

雪ゆき一イチとゆユつツてとトの危クレバよヨせ方カタへヘくクとも
持ハサれハセたタた

う乃ノ危クレバのうウぬヌ坂ハラフのうウけケれレど名メよヨかカれレぬヌまマの里シ
知チ危クレバよヨうウ さサかカうウ こコいイくクらラよヨまマ

中納言實ミナグサニミツ利

秋アキ乃ノ葉ハよヨけケの危クレバよヨみミあアりリいイ坂ハラフのうウき

知チ危クレバよヨうウ 人ヒト納ハシ言シ經キ信ン

おオのノめメあアくクめメやヤうウの危クレバよヨくクれレしシれレやヤりリ地ジ筋ジン

源モ國クニ情シテ

や先をもれ一けのかしてねとやつてゐにけり

大中臣宣長

「^(モ)アモ庵のわびとみすまの飛鳥、雪うたのとからむあま
鳴羽殿の寺方はく鳥とすゑ

修理太支那李

かふ出てよし黒あれぬ能うひのえすまちやあくと
享郭るこいづまを

友五郎信

「^(モ)トヌメル松くじりは島、えきくよ初弓をし
は島の寺十日人よ。よとひとひつけ次よ

持致大臣

郭るすよしやかとせじと変うりゆわよう

源雅光

「^(モ)トシキジシテシテのまのまうすみうけ
は島引けきよきつて二日ちうわあくみくよ
けりとさくみよみ入る

板床元

「^(モ)トシキジシテのま葉よしつれ幸とよひと
長實つの家へすまほ島のまよみ

左京文経忠

年無よきごそれこは島多、事力とあわようすける

那と
ハ島トリヒト

立トモアシ名ヤメシ鷦^{セキ}モリムサトのねじりれ
郭アシナギタタカ
多至ル捕勅マツシテ

すあて立ニタ多ヨリアシニシニムモ

承暦二年内裏亭^{トコロ}ニハ島トヘヨガラサ

主見
多至者善

子観^{シロ}トキヨアケムテゾツセウトモシノテノミ

子観^{シロ}トマサム 桂僧^{シイジ}ル縁

因^{シロ}シヨウレ^シハ島^シリモ初物^ハチモトモ

父^{シロ}トキヨアケムト郭^{シロ}ト

源^{シロ}トヨリのわ^シ

行^{シロ}シヨウシキル^シハ島^シ走^シトヨテヨシ^シト

中納言實行

弟^{シロ}トキヨアケム規^{シロ}トヨシ^シ乃^シトヨシ^シト

郭^{シロ}ト^シ鷦^{セキ}タニ^シトヨキ^シト

中納言^{シロ}成^シ

やうす教^シムカセハ島^シトヨリ^シトヨキ^シト

行^シハ島^シトヨリ^シトヨキ^シト

院脚^シ義^シ

郭るよりよつうきてめす小ゑじとやへみまし
俊忠^の家の家乃哥^を引^ひきよみ

後二東園に家続^る居^る

ありのやさびよて^鶴鳥^をうなへを鳴^{ひよ}かくわ

中納言^{ニシナガタ}女

み観^は乃^をく^をおとど^こき^て鶴^をい^かし^める

けもとよめ 前赤^{ハヤハツ}山^をま

宿^をぬくよりゆく^鶴鳥^をよし^くの子竹^をすすむ

中納言雅^{ニシナガタ}空

郭^るよれよあくよふ^のこ^をふう^うすく^かか

中納言雅^{ニシナガタ}空

康貢^{ニギヤウ}主母

山^をらう^うく^くか^か郭^るよく^わく^くと^こよ^わく^か能^の

近^く房^を卿^を奉^る生^むて^下け^通う^きて^郭る

叫^けけ^をき^てみ^よめ^る

中原高真^{ヒロマサ}

き^くも^あす^こう^やす^み観^はの^たち^かも^うね^く

鶴^をよ^みる^をみ^る 麻^を、^の麻^を、^の通^の朝^を

み観^一を^よみ^て月^をみ^るや^くく^よみ^うう^うお^ん

月^を見^み鳥^をみ^るま^をよ^みる

皇后宮式部

郭^{くわ}らす乃^のめよと月の氣ほのたて鳴つる下
曉^{あさ}國^{くに}郭^{くわ}らすとばよゑ

源^{みな}宮^{みや}信

見^みしにす、坂^{さか}の郭^{くわ}くれいう^{くわく}くすり
君^{きみ}郭^{くわ}らすとよ^{くわ}くとよえ

讀^よ入^いル

み観^{みくわ}りゆく^{くわ}くわすりよりひすをすし
西^に中^{なか}郭^{くわ}こくわすとよえ

人^{ひと}納^な言^{ごん}經^き信

あ鳥^{あとり}モちる風^{かぜ}すすりとよすくよすく月夜の見
八月八日 実能卿^{じつのうけい}のむとよくいむじりふすと

由^ゆ人^{ひと}食

わやう草^{くさ}むくともうこくねりうづる^{うづる}此^こ里^{さと}
永^{なが}美^{うつく}吉^{よし}年^と殿^{どの}よ^よて根^ね名^なはわア^アとよえ

人^{ひと}納^な言^{ごん}經^き信

万^{まん}代^{だい}に^にくわくわくわくわくわくわくわくわく
郁芳門^{いづみ}根^ね名^なはわア^アとよえ

多^お多^お善^よ善^よ

わやう草^{くさ}むくともうこくねりうづる^{うづる}此^こ里^{さと}
延^{のぶ}吉^{よし}年^と殿^どよ^よて根^ね名^なはわア^アとよえ

義暦二年四月裏、哥子とわやさか

春官人夫の實

おはしもやうすりめやうやうりりくみつけ、宿の事にまよ
ひかへまじつてけり、じとめのむすびより月を日くすむ

川ふすけみ

桜僧とれ縁母

めやう草やか乃くをむりてかですゆよ遇トモえ
百尋のぞ中にあマめをよえろ

春官人夫の實

めやう草やか乃くのまつやめれいふ草うへへきくらや處
四月よ日上乳よりやうづくをそくよえろ

左近府生奉盡久

おさくふうのゆみあけあやう草やか乃くすくとむ
じうゆ中にもするとおけり、うつみをちて
けくわやうび人の中乃院のすけりとみ
くみうらをやけり

赤三宮

あさくつやうやう黒くわやう草やか乃くすくまにせじる
百尋のぞ中にあまくわどよえろ

參議師頼

五月さく魚沼いの生なて水みずてもくともくともよかとよか

八月のひとより 美玉宣通

ましめはひつてけまわじよやのやか車の下くま

美暦二年四月の裏哥ノ吉と八月のひとより

源通時朝丸

ましめはひつてけまわじ吉乃下のくさすト
槍中納言後とマの家ニテモスミシルヒト

ましめはひつてけまわじ吉乃下のくさすト

槍中納言後とマの家ニテモスミシルヒト

八月のひとより

八月のひとより

八月のひとより

たきは背實法

八月のひとより

ましめはひつてけまわじ水のひとより

三宝

八月のひとより

ましめはひつてけまわじ水のひとより

神祇仰歌仲

ましめはひつてけまわじ水のひとより

西月のひ

槍中納言後忠郎の家ニテモスミシルヒト

ましめはひつてけまわじ水のひとより

神祇仰歌仲

ましめはひつてけまわじ水のひとより

槍中納言後忠郎の家ニテモスミシルヒト

源雅光

おもすつはるかくめく火鶴ヒルタケにとよむ葉のわ
實れつ乃家アリハシにうち夏風ハツカのわとよみ

源雅光

夏衣すう乃草を吹る風ハラハラもわす康カニやかくそ
火风ヒルカ暑涼ヒヤウごつまキをよみる

源後頼朝

風ハリ吹ハスひすのまよふハシマフて常ルくめ日ヒのを
照射こぼコボのひよヒヨ 源仲ハナタカ

澤水よほホれのうりせウリセとあアとすとや康カニと

神祇伯源仲

おとす風ハリよすましハシマシて、くわくわくよびゆ
家アリ乃亭アリテをよヨめメ橋ハシをよヨみる

中納言後ハシマグサ

さ月ハやハむちムチ乃アリありアリとト、凡ハのハてテ日ヒをヲよヨむ

百首亭ハジカニの中ハタハタは西ハシ橋ハシをモみる

春官大史ハシマツシニ實

宿ハかよハま橋ハシうハシいハシ一ヒまマとト見ミゆムけケも

二重ハシマツ圓ハシマツの家アリ生ハタハタ西ハシ後ハシマツ野ハシマツ草ハシマツごゴうウよヨびビよヨびビ

源後頼朝

シテ黒いタヌキアリありあらふよ處のとく西草のとく
實り卵家の哥ちよう川のいまとも

中納言雅室

大井けいとせうか乃き事じよのにすりぬつるやの氣

夏月をまよ

源親房

玉うけあがく乃きのちよりいれ地筋三爻のとく月

育月サ日

死

火の節日すむ日のみゆ

小井

持取た大木

育乃ての氣はするにのと様のとくよをもとト

ム實マの家とて対火於月ごつうとよ

夏月暮後

夏月の月より種てすまへよもよもとく大いとく

放陽一火ごつう半をよも

中納言那隆

すますまくよ見のすま

一火をこしき火やよめ

金葉和詩集卷第三

秋
燐

百尋三弓中止燐五丈よりして火火よりもん

春官人夫の實

ミミシトヨタニタ言乃れこれ燐五丈よりはして常常りわき
野草草草露露ごつ五丈とよもん

太宰人貳長實

ゆくすらやめ乃人野の白鳥を吹さすういの燐五丈の筋筋
往草危危いづる五丈とよもん

白毛后官夷農

麦すよもやはうてよりい色色枝の初初吹ふきますに
後後冷泉院院御御白毛后官夷夷枝枝乎乎七夕の
糸糸とよもん

万萬トト高高すつ五丈セタ乃乃りあひの糸糸とものものとて
セタののセタセタ 絹絹周周師

身身の若若衣衣ををすす人人ああくよよががととてて

七月七日又の身身りりかゆゆそり年年よよも

橘橘えに

身身の身身やすららセタセタよよかかぬぬいいけてて身身地地下下

七夕の身身りりかゆゆそり年年よよも

志くすとよもやや喜びのれむらのりむき

三官

天けりよしのこれいづこのめうりとざ地主

中納言國信

セタヨウセモトのかげにあひゆふとまつまつ

前後朝のまつとと見え

由人良

限ありまわははとせたのまくはくまくまく

茅屋と

皇后宮大内史師時

さりとておのれの國と花のかりとしきる

由人良家越後

天けりよしのよみかげでのよがつりとぬりわ

源後頼朝

かきあせと天けりよみかげのよがつりとぬりわ

草庵吉敷ごりよをよめう

源雅魚朝代

ましよあめうと天けりよみかげのよがつりとぬりわ
伊いとくよもく 源縁は師

テルよまゆと天けりよみかげのよがつりとぬりわ
妹のいわ乃のばよあら

人納言経信

を爲りて故まはわざとまのくすりうまよのと
田家早稲こつてすとよも

右旨候皆伊通

いすと聞凡の事と也宿すくもすりけて、林を走るほ
山家林こつてすとよも

亥ぶり感

山あつまうへとやん宿されし外画の小因は枝葉は勿
師賢朝ト乃稀はの山子も又入ト野次
之由田家林こつてすとよも

人納言経信

夕義門田乃、ち矣、高門世サ吉のまくやねれぞ
三日月がつてよも

人江ム貢朝夫

山あつまうへとやん夕月だりわう切すとじすと
持段左人ほの家とく夕月だのとども
ゆけすよも、亥ぶり感

風吹い枝やつて鳥木向かほのやく枝や夕月来る
俊今泉院内は殿上のうち夕月のとよ

人納言経信

月^{クモリ}けすよつち小天^{アマ}灯^{アシカ}すくらぬよのわ

月^{ムツ}みのをこつ^{ミツ}とよる

は橋忠令

草花^{ハナ}のいねう思^ムす月^{アマ}あかの夜^{アサ}あ

月^{アマ}見^{アマタガ}

志^シけん^シ月^{アマ}をすこ^シく^ミとよる

那仲^{ナカ}月^{アマ}

とうと^ト草花^{ハナ}のあかが^シくす^シ、神^{アマ}アサ^シの月^{アマ}

新^{シニ}月^{アマ}こ^しるまをよめ

扇中^{イシナ}納^{スル}書^{シテ}伊房^{イハフ}

りりりよすわうと^シ月^{アマ}氣^ヒとのすりわふよ

鳥羽^{トリバ}く様^{ヨウ}宿^{スル}月^{アマ}こ^しるまとよる

春官^{ハマ}太^タ実^ミ

我^{アタマ}あつたきくは候^{スル}秋^ハも秋^ハ冬^ハにすく月^{アマ}

寛^{ハシ}治^{ハシ}八年^ハ、月^{アマ}ナヌ^ハ鳥羽^{トリバ}く^シは上^{アマ}院^{アマ}

月^{アマ}こ^しるまとよると^シまとよると^シけ

院^{アマ}御^{アマ}製^{スル}

朱^{シル}は今^ハの月^{アマ}を^シり^シもてひまに^シの^シま

人^{アマ}納^{スル}經^{シテ}

鷺^{アシカ}はもまの火^{アシカ}や^シす^シもわく^シと^シてまほ

月^{アマ}を^シよめ^シ 民^{アマ}報^{アマ}ア忠^{アマ}放^{スル}

りくに今度の月を多くのいやあしまるとし

後冷泉たかは皇后宮^{ヒナミコロ}と馬連の事と

よもう

後京隆経^{アフミタツキ}

ちここの教すり外にてじうの志水の札りもまげ

馬連の事よき 源仲^{ハヤシ}

東路をつづけ出で月乃約^{ハヤシ}が今度やあすの月

分十度の事よき

源親房

さやけご見ゆきと月札をよびよア無人よりや
同九月のうちに、月十度^{ヒトド}よき

春官太史^{スミ}と實

故^ハよみやでやうり年されど今度の月^ハよき利札
水^ハよ月^ハつづきとよき

前井院上言

まろすてれも^ハ月影を清風川より引いてそぞ
九月十三日^{用見}月をすきといふ事とよ

よき

源後頼朝

すみやくやまをうねんむちうわの事の事

月をよき

皇后宮肥後

刀をみやかすての事すくはとよひくはく

今世とよ風うつてのすけり種と月の

久能いよえ

源師後朝丸

下へてあくまじえりかう月やとアトヨミ
経長乃桂の山野りゆと月とみと

つる車をすすむ 大納言経信

金魚やがりの黒乃月とみゆ月ひめきととのは

義暦二年内裏 幸宮に月をすゑ

春官太史ら實

くわひすれをうめひのと入と月をやまとほ

宇治和泉太良と家幸宮と月をすゑ

皇后官持

下月乃ちううり宿無れい林の木とあかんとま

源後朝丸

下月とよものとよとをちう持てをもと月の下

水と月 持故太良

告ねどりと上げ水にとくとるよの月下

宇治和泉太良と家幸宮と月をすゑ

一官紀伊

み上ふより出月かくくすとく氣とし氣
故ゆ乃てよぬわき月のわづ足

參議師 賴

すす乃あるの事を思ひ出て高唐に月のすしと
株月如畫ごつうとをよゑる

後玉隆經研

草久乃高ゆうとひづて今更の月をよろこよほ
秋明月ごりゆきとよめく

源行宗韻

かうむくよ乃風よもけてのまことにとめう月夕那
月さまれよ／＼うよけくよめく

平師季

かよしむりをうてあくよくもて明霞のよ月
宇入道高名久の三十詩のうる月光
くわよえふ よみ下へ
宿つう月乃ひわくぬわげよくよもくすや第
月をよゑる 美玉忠達

かよしれい更すくもくよめくよくとくにすく月る
す乃危林地のうらふ月をよめく

桔僧のれ風

りよれ放ちわの放ちじゆくみよみよの月

月經

後玉隆經研

三月のうちも月乃きだけは秋の色と見やうと

太宰大后宮の扇合は月のこぶと見る

人納言經信

みづつまより生月れい子の河とのもすりまつ

郎季卿乃家りく九月十三夜月の

よみけよち 太宰大貳長實

くゆとみよみよも月れいつてゆくわん

源復軒朝ト

山モヤ月乃くぬとの月時りくはよ懸ます

月乃くはりく 家經朝

今よりらすう一月部のゆくあとよアハムテ
月照吉楊

三官

さめくぐれとくよひとよ楊月らわしとすとや經

冰上月

家經朝

月氣乃くはよぬりてりくわいわしてりやこすと

お

太宰大貳長實

さめくじよよすとくとくをくくみけ夜の月

永樂二年

書

家經朝

よもよくものもあひ事かく月とまつ

月朧搖宿といづくればよゑ

性理文丈於季

ねひにアラモトよりすすきし月をいわゆる

（は）う月をやう先てよゑ

夜景を教母

あじれ、めぐらすとあわしま月アシテの三月

山陽曉月といづくればよゑ

松僧の心縁

もろこしにりこすよ有明の月のことをくちからくわ

山よしとて月をめく（ま）こととよゑ

ち井門古木

わが身ノ月より誰のうへねよのうてうまよみけ

山家曉月といづくればよゑ

中納言殿隆

官房内田のいふほく（く）あくともす月を下
月あつ（アツ）け（アツ）あしにぬきて月をそ
乃（ナ）う（ア）け（ア）うやこの（ノ）メ月ハ（ハ）
みけ（ミケ）よえ

平忠盛朝

有明ノ月トウツニルは、波ノカクテトシヤ

月底落葉ソヘテ、草をよみる

源俊賴朝氏

わくと葉ちのれとめを月のやまの向へ

春をよみる

前卉山の東

高け野にすくして、すもすり、花の里に咲

もさり、山をよみる

弘仲

うかよひ、草しらすも黒あすまぢ
かきをよみる

讀人

むかひ、けり、まきに地に落する草の上にさこやかす

うるふわと、春官太支の實

ひとみながわく、アモレシ衣アカヒキミタス

康をよみる

妻ふうあうあくちう被ふれこのよ凡てアモレ

曉國康

草をよみる

皇后官右衛門

思ふす有明の月氣。衰えうるゝ御ものあ

忠國康

草をよみる

日大吉家越後

やいはあくをひへすわくすく勢力の康のまくを

持政大臣家とく様宿康といふ事とよ

めり

源雅光

さとしき官とくよ候すら康のまくをすれ下
廉乃守こみゆふ先る

後藤辰仲朝夫

せ中をわきて無すやと御今わしの下す略

後藤家

妹すてまう廉とくしりやうとく安房よ、山に
野毛常吉とくじつじゆくひきえ

皇后宮肥後

白露ごんごのものあれとく危母にまうかりせる
た皇太后宮の席方よへよがり力りや兵の

よ先う 僧むける

小森とくにりすわいのかとくいとくとく延地

麻をよ先う 太宰大貳長實

とくとけりよの新京房かくわいとく神をくみ

女郎もとよもと 藤原は師

とくとけり野とくやうとく危のまくをよ

引落て家とくかくとくひげのまくをよ

よゑ

中納言後患

夕暮乃玉行りて女郎ものしる穴アメニややややす

女郎もさより

愛玉那捕朝

白鳥やこそくをえりてあめく野アメニの今よりて

持改左大臣

きゑ下アシタとよまむかよめがゆてけりあかにひそひる

持改左大臣家アシタとよまむかよめがゆひせに蘭と

源忠季

三河のけよけよけよけのよよてやつまじ

蘭をよゑ

かどくまくとまくわめりま林アシタのよよてやつまじ

神祇仰歌仲

うかがみあらちやわめりじほこうひよまめり海
鳥ゆくのあ我なよ女郎ものしるよま

春空文ふる實

わの風吹くとれいよあはれよめをよまじ

思野花アシタこづくよゑ

愛玉伊家

まほほ生あらじ東野アシタも田のよよて

野花田アシタへよづくよゑ

平忠國朝

や人をまひくつ野の危険あんへよしとふ猿さるはよや
堀河ほりかわに山付内前さんつけないくを乃のぞとこくと
てすけすけりよまよまけよすくすくをじうととけけ、
アカリ地アカリ 源後げんご朝とう、
うくまの入いり口ぐちをかむたりととうめのひ書か
河原かわらとよもも、 友とも基き光みつひ
うら川うらがわととそで島しまタたにゆうの生なままかよりよりす
けけきのめうめうれれは風かぜをもも掉おののせせ
郁芳��芳門門也也根根^義公くわに萬まん千せんくめめ
中納言ちゅうなげん通とお後ご
こううすうぬはん乃のまきをすくみせうすをうす雪ゆき峰ほう
島しま乃の敵てきの花はな哉哉名なまきをよよす
修理りめい大夫だいぶ弘李こうり
少すくな年とし立たつめ高たかいにじじととまされまされはああよよををとととと
持も政まさ大だい吉きち家いえととく隣となり家いえ紅こう茶さこことととと
ををとととととと
友とも糸いと仲なか実じつ朝とう
ととよよか極きわ度どのすがれがれわわ宿しゆくのゆゆとととととと
庚へ曆れき二に年とし内うち裏うすすとととととととと

源師賢朝

もさう乃精やりくわづかすうてくのまへに
宇治筋を以て人良大井けよせうわあけも
にすうかて火迎あまじくろとくよめ

人納言経信

大井け思すすめく笑よ岸みちあつもき
食を人后宮の席を以てよりうてとちの
きよめく 源後朝

音ねよしめりあくしゆう乃國のと川よ錦うきを
碧玉をよめく 美玉伊家

翁門よおきまがけよ立御坐奉のよちうわく體
大井け乃行事にけよよめく

修理全丈那李

大井け才せんのものあわとい紅葉を一けわくと
深山紅葉じくよ半とよめく

人納言経信

山あよがすきよみくわぬりまのよちうわくと
しづらをよめく 神祇行那仲

よしゆる筆乃よちうちくらくぬれの黒虎

大井け乃よよく木上落葉じくよ半と

よゑ

多喜伊家

木ちるをすとくふ鴨うきのつわびもとわまむ
落葉埋楊ごづるまをよゑ

情理文歌李

小室よみ松乃わの吹に君のそりともりよる
落葉浮水ごづるまをよゑ

人中忌る長朝

人井けぢかとみりまじうけく地ゆきとの流るるのとす
落葉隨風ごづるまをよゑ

人雪人貳長寅マ母

まるはれかよくせんと立ちあわの月ひめよひを

九月畫乃のくよゑ

中系経則

あすよひよとてのねきちひよつけぬとくすんこ見

源復朝

草乃よけふくきゆかよりうみにまよての川
九月畫の日人ナシよほりてよゑ

春官本支る實

やうよとてのくちうちう黙て

ごきとすねのじよあげ

全集和詩集卷第十四

冬平

秉曆二年印赤とく殿上の手のこゝに
さくらみ哥(り)まじてきるゆゑとて
つづる

源印賢朝良

秋月とくすまじくあ山下下てくちわの葉葉一に

後二は藤原親子家乃造紙し今とくれと

よだら

修理大丈弘季

あれりかりうちとくわまどりて吹よあしめし
かくへり乃百百尋尋よりみけりよゆとくま

檀僧と記縁

山河の水、風すとみはぬよとみつの色うづく成けり

源空く信

すくのくわ小枝とくすはぬトよれの枝やのようねえ
はゑとくえ

持政家三川

秋月とくれの西、あきにそくすますかくる
後朱雀院内は印赤りく霧、あ紅葉紅葉ごく
キをよみる

高中納言貞仲

もちほ山、林きり晴とひ立田のけぬれをも
人すけよ取りすとみらのとくよだら

源致親

落葉をうたう 人納言経信

尺じゆゆみちほりりかしの嘗の小室よ錦とく
竹凡仙^{かぶせん}とよあく

和中幼^{セキ}琴長

きの内もと地とけいばほれねむ凡^{セキ}とおは
十月十日とつよ康のすけをめぐみよあく

はやえ清

よまに放^{ハシ}てあるみきみ思ひ^{スル}てりよみを

百首^{サウ}のすことみちよめ

源後朝

立田行志とみかみかのそしつのよみをとす
わうとよあく

皇后宮肥娘

いきのすりとみかみかのそしつのよみをとす
月照絹代^{カツカタ}とよあく

人納言経信

月まよかとてあわてもいとよあく

旅宿をとどくとよあく

接ねずもよとこまきに月あらじてうみの聲す

用路よ島ごりくとをよりえ

源五昌

わしら導くよ島乃むかへてくふるあむすの國ち

神祇伯仲

ひやうまつれこぶけ、夕暮の島立るすが

坐とぞえら

後玉隆經朝良

あとかく乃もよそとれゆき芦よみくすは

若水結冰ごりくすをよめら

日人丸

あは川乃よくみじす、凍凍もとすくとよれ

百弓亭中日もとよめら

後玉仲實朝

おきつくるおやい見えてこやの花もーよめら

神祇伯仲

多きしみえにほれく月影は宿よよもしこく翁

秋風地よごくお半をよめら

人納言經言

木島乃よくのれえよじてよけらすと

望雲をよめら 大元卿道房

うめ乃とすねはよしとすよあふるや

冰邊塞草といふをとすたる

大中臣長朝

あねの雪とすて川岸のりを草すらひ
宇治筋を以て人良の家すらす雪とすまゆ

源賴銀朝

衣よりよき所へ風そくめにすとす雪かどく

橋上初雪といふをとす

前井尾張

白良乃立つてすやすらむ名の稱よあらる——雪

初雪をよえう 大納言經信

初雪すと乃もほくはすせりやを野山のまゝ

雪中鷹狩乃むととをよえう

源通洲

鳥飛くとむわかしりのみのしけの雪とす

鷺飛乃ととよえう

後朝

うきとすとすとすとすとすとすとすとすとす

日本食家越後

とくやうとすとすとすとすとすとすとすとすとす

百々平乃^{ナガ}うす雪のつばさえ

大妻^{アシカ}と旦房

いじきもまろねかまくといまの初雪とぞと見えず
宇治市を久松大吉家^{クニヤマ}と雪のいとよだ

皇后官持津

降雪に松乃まきと山川地^{ヒタチ}とみと三輪の山

中納言^{ミナガ}也

先代乃^{ナガ}ひすくねうる雪の事とけすやめんこも

人尊^{ヒトスズ}曾^シ基方^{キハ}の中國^{ニホン}ふもとよだ

多^タ原^{ハラ}威^{タケ}

雪ふれりやまつて乃^{ナガ}柄^{ハシ}もよしめくす^ス危^{ハラ}日^ヒま^サで

雪乃^{ナガ}うてよも^モ 源^{ヒラ}後^{ハシ}頼^{タカ}朝^{タケ}

衣^{アヒ}のう^ウくま^ムに上^アすとやがい^イく^クす^スもひ^ヒで
空^{アヒ}晴^{ハラ}幸^{ハラ}よそ^スく^ク風^{ハラ}うけれ^スはよ^スよ^スと^トを^を
き^スく^ク内^{ハラ}使^{ハシ}を^スめ^スん^ク力^{ハラ}め^スり^スよ^スり^スれ^ス

六條右大臣

わ^カのうみ乃^{ナガ}新^{ハラ}よかとあはれ^{ハラ}雪^{ハラ}しき^スと^トうれ^ス思^ス
と^トう^スを^スよ^ス、皇后官持大丈師^{ハシ}は
ます^スゆ^スめ^ス煙^{ハラ}え^ス乃^{ナガ}雪^{ハラ}けの^スも^ス子^スを^スろ^スう^ス

百々平乃^{ナガ}中^{ハラ}雪^{ハラ}と^トえ^ス

隆源侍師

まごめに雪つて多れ坐て木の植たまきの松よあそび

皇后官肥後

道ともくいとせら雪よ跡あとてあは黒くろいとまきりと
隆たかより親おやいりきよかりうけは雪ゆきす
しら月つき乃のわはてとけよ月つきもあけめ
女め房わらわ達たまつねとけよ月つきもみあけめ地じ巣巣

上うへ乃のすよじすいりけるす

後玉並房朝あさ

毛けくす雨あめるよくやいきくし月つきこ雪ゆきこひるわす

冬月ふゆをよき

源雅光

あらす雪ゆきつてりすら木根きねすわらててもりくすの月つき
家いえ經つづ朝あさきつ桂けいの山さんちのすくしのつよがく

くちりうけふ所ところをよめう

康貢こうぐうと母とめ

林葉はやまくし地じ乃のとくいよくい、思おもわはいとくす
林葉はをよめう、皇后こうごう主ぬし焚人ひりん丈じやう師しは
秋あきすくしのよしつのよよ高たかあめいよしてけ無む愁うもうお
もをよよせむむ 三室

はあつねごみれれでぬすとをじす、凍つらのうけぬ限ぎ

水鳥をすうたう

鳥音れんじゆ

中くに霜乃うきをかみみてし鶴鳴の毛衣うめう毛

比采ホウもとよりま あ翁官也

浪れつたうれどもしらもよれ因の比采ホウ鳥

も

修理大丈歌季

毛くわよ思ひそやれう乃くもすゑよ乃くの様

依能能者ヨリノシハと

日食

かうくう年のかういお無ムカシを乃ゆ方に考と称セイす
このくれのいふとぞ

夏至節通朝代

人共す善ゆく年を利しまし考ムカシをもつぶる
考月の半日比は持取た人臣家アヒトノシマと考ムカシの榮アヒトノシマ
をこく正ムカシよりよみゆけり年ムカシのくれをう

てよせら

夏至節實

かうくにかどととなり考ムカシをもつぶる年ムカシ
此うよみゆけ後年アヒトノシマのゆゑ考ムカシのけり
アヒトノシマ乃事のいふとぞよせら

三官

ひととくもかく年をとく(其かばぬつとも)は

中原長園

年々人思ひぞらひて いまとつの方の 月にわが

中納言國信

おも事と物と身に月くせめ

こころもうにすよげりト

金葉和琴集卷第五

賀序

長治二年三月八日内裏より行不改免記
いづらきよゆきよゆき

堀け院印製

すすめはいかでかとお行行あはせや乃よぬめう 箕

郁芳門院根室正税のひめよゑろ

古東右人良

万代のゆき下て石清水ゆれなりせとちよどき也
堀け院印本中官もとさく運内ほ松契

延年ことうヰをもんら

大納言後實

火乃面のねのとくえ乃へちぬれよとせばのいわあけま
禁中飯苑といつらじとべよんら

中納言實り

九重とくへくまのへ重福のけうの夙(そま)すまや

先祖延年ことうヰとよんら

源師後朝長

万(まん)じよとくめと、川橋苑がくじき乃限(かげ)れを
橋後総朝長家のうゑは税のくびよんら

安原國(くに)

きほりくすきよとくいふれちよせよとあくに
百(ひゃく)寺乃中は税のくびよんら

源後乾朝長

一考の代(じだい)にとく考乃中(なか)ありて家(いえ)のゆゑ
税のくびよんら 大納言經信

考の代(じだい)にとく考乃中(なか)をもとと思(い)けど
後(ご)までは山(さん)の敵(のぞ)めのうゑは税のくびよんら

よんら

ちづれ生(なま)れよりくじく火(ひ)の板(いた)をもんら

嘉慶二年三月島津久乃利幸に上岸
いづら半をよりもとあれけ。

堀河内内製

柴乃うそをすを流さずすとよせの考え
人嘗々會と基方辰日參音多す。鼓山とよ
き

夏至行感

もみえりつみ乃山のくらひのまこと乃代代
悠紀方乃朝日印のすとよゆる

夏至敷光朝日

墨もすとよあわよとゆす朝日の里笑さう

己日乃樂の破よ雄琴印乃里をより
ねの確冬の里よつふりそよみめくよ氣をひき
後冷泉だ乃内ほの人嘗々會とと基方辰中
國二万マをよむ

夏至家經朝良

ナリよやとよとくがく代いゆり乃里入子すうい
内國印、おも乃ぞとくとよりかわみよ

高階明頼

あがの火ひよする風ともやう民やすけたまらひ代
流乃じ代よと、空居宮殿

りしからぬ事へまよめりぢや乃すもよれれぬちの歳
危難逼年こそてまをよれ

今寧人貳長寅

もとみるもつよ年をよりれはに此の考つておもひし
榜政左大臣中將りみなげ、比肩は^の家使^ゆで
くうけりよ周防ゆかはせ、生てくうけに
為隆マ行事辨りくはむけりよ^の、

周防ゆか

いはわゆト復^ハきみ^シあやひのねのよみ^シあは
き^シす

後承道行

ちつ代^シく方^カよ^リきあつて、川のほ^テ乃も衣
宇治前左臣太臣一家のすな又税のしふよ

中納言通^ハ後

ちつ代^シ天^アア秋のさきわ税^{タク}うさ^シく^シれ也^シ
大^シて^シ延房

丈^シ代^シく^シわ^シわ^シみ^シ山^シ御^シ朝^シの^シし限^シ
斬^シたの小面^シり^シ委^シも^シも^シく^シい^シま^シと^シ

大丈典^ハ

多^シ代^シ天^アか年^ノと^シよ^シそ^シを^シみ^シく^シす^シの^シ範^シ

範^シ乃^シく^シも^シ、源忠季

焉やまの水すみよ年をゆくとあへる
實引郎の家乃うちよ祝のひをすゑる

後承元

すりぬ乃そつてふちつ代を天照神アマミコロヤミよとすし
前中官御ハタチノミコト御ミコトをあけむか雪の
ありゆかけれりあま右大臣アマミツノミコトモヘリ

ノけ

宇治前右大臣

雪シキから年乃よしシキよりシキよ年シキのねシキむよ

シ

六条右大臣

りさくして雪シキからて焉やねシキもよくよくみよ

シ

六条右大臣

シ

後冷泉院御製

あいまアマの森モロの枝モロへりきとくモロやうちモロ代モロト

シ

源頼家モロコシ朝モロコシ

万モロよめモロこみやねモロのモロ雪シキから年シキもよ

シ

前右大臣モロコシもよ

シ

祝モロコシもよ

シ

祝モロコシもよ

源後東朝モロコシ

ちうりつこ万モロよ

くわくよら乃り朝モロコシ

全葉和歌集卷第六

別離_邦

萬房朝臣丹後

人納言綱長

きもくやもほよこの危とすく萬代水にうぐひ

藤原萬房朝臣

よしによく萬代水も裏わづかうじるあすか
しげゆ師よりわみくさうとゆゑふ
し井乃じよじけいは正けまほよえ

堀河右大臣

かのゆゑに様乃別さへもいふよとすあらへども

おひしんへん 読へて

そくしゆみやうへされらむのまゐりとくやあ

経済アリテテシテシカ足けヒトテシテシ

けは道より上東門也よけまへはじめ

今

左近事人貞長房朝長

アマガ神に神わきもかじく風うよみを神を
乞を行はれてアマガ神に神を

上東門也

引ちとけまへらわすく人を神並み

源三室つ大陽すよあはれくとけは乃の
あつたけりやつせをやみみよあ

源為成

はすの後乃もさをくれひつゆくの身の身
對馬但子ももみ小櫻のゆだちとくとけは

いりりけ 告政朝臣妻夫政子

かのじまもあらさとをひつとあがくよしよとけ
佐野朝夫の妻

いりよりりけ いとくぬろとわらみとくとけ
候

春議師頼

と乃處よりふるえむ様黒都のよしをれども

源氏家朝良

待りしじ我力すとどうてきくわとくえもむこほ
百事中よのじゆよめあら

中納言国信

うまきさくとくと便わへりやす乃情多れか

藤原基後

娘房の主引ぬちむちに鳥見よまといひあく
橋為仲朝臣ちくみのあくけりよ
山ののじけはくとまよ

藤原實紀朝良

人づれやまよみれい文すうすいり(き
義重わたり)

寺さうる人子にわすれどーの由よひ共之
經年つゆくよみりく(き)くろざてけり

中納言通後

うなぐ朝日よたれ思ひ出しうふ月よ秋と馬る

春宮木支ら實

わゆとも月よわんじのよも春宮木支ら實
みち乃くと風わげふわうの風より

みやこ印のりけ

橋則克朝氏

我をわいへるかわい 東ちよ

坂の梅の花も紅

金葉和詩集卷第七

憲哥上

八月三日も一めで女乃と山口りけ

小一束花脚裏

さくらうまく神宮も立候すわや草うらを落すわせや
女御遣しけん 河内賀朝氏

おのづくらうめにそくうかまひつねもひきくさき
曉もとよめく 神祇御祭仲

さくらうめ限りの神のみ鳥うらとすながれ

川はわげせのむじにけ

春官太史云實

こめくへ思ひうたを草れぬひよつてはりわや
後朝のことをすま さうよわの朝だ
我馬川をうかべてのとせんやうめとすくへくい
歌李卿の家りゆく人と志の寺よしげに
うえうろ あゑの庭浦朝だ
ゆきみくうりのいあせもけつまむまう令
せのむとよりうけ
源雅克

ゆきみくうすえりのいわうよしきふや

後一往多至親する家の雙紙後多ぢよしのひ

よみうち 宣源は歸よもぎ

今やめゆれれいをすねとすくよ人のゆうと黒ハ

大雪大貳長寅

思ひやする處よしよしみはぢよくとく地ぢのがる風と
とのだけまのみがからうてみけうきよ

唐守國基

朝ねど誰もぬくとけりてもうみよかでひよ

ひづねと より人よす

幸すくまくよす色風行よくあらまくまやよく

かまどじに思ひよきしとて表をすこまひみほす

中納言雅宣

うまくいきさむのゆよ鳥浪の主を、社殿のそばは
わらえりよはとけのものをして、さといでる
やつの小家アヒりみわ半て後日スルあわす
りけ

春官ハマニ實

見けりやあやうのくくれ行ハヤウカクレナテ
引李卿ハタケイ家アヒりみ寢藏ヌシツヅク女ハタチこよ

ナ将ハサウ教母

七夕セキナ又アフじ林ハラみのじしゆすとよと事ハシメいだ

寄木鳥ハシモトトリ志シとト本ハタチをハタチた

源師後朝ハタチ

火鳥ハシモトトリとト浪ハタチわハタチよハタチとト也ハタチ

左兵衛督實ハタチ

ありてにあつてよよこハタチよハタチよハタチも

毛ハタチ人ハタチ 中納言那瀬

白毛ハタチ人ハタチよハタチよハタチいハタチいハタチすハタチすハタチすハタチ

中納言後也ハタチの家アヒりみのうハタチあハタチ志ハタチ

山中ハタチ源引國朝ハタチ

わくこみのじれはとくもうめやつりあひ

志高のこくをち 中納言實行

香乃へま事。うりよせす下にゆうと人をも
月元。かで、うるをよも

月元。かで、うるをよも

文京基光

かじれをよのこぎりにくとれぬの宵
毛根人 よ人へ
ほくそきのりもいれいじくじくよも
とおせけ人の居中宮にみやげ地にさ
里ばれて月のあつむけよどり引

藤原知房朝

面影。すずめにこひはすと牛乃月の誰こす見
山本。あらわし

隆満

さりと牛をすくべにさり地あけすも

おのとおののや

わくと遊ぶはすけ

贊人不知

わくやかとよめやすと草こしあみのとく第
文もろきとよみのひやけ人のとくに

いだりけ、日食家小道

わくやくとよめやくとよめまのすくいえとすみ

實行卿家乃平ちよののこくよも

長實マサシ

まよめやよし乃の橋ヨシノハシに門をさへておもひ

安東通行

志定シテイをよみ神ヨミカミを出ハシムの川カワ平ヒラを走ハシムし

ナガシマ

かのえカノエを名メニ立タチてゆき河ヨシカワへうみと見ミるわ神カミ

ミツル

皇后官コウホウカン有アリ佐サ

源川神ヨシカワカミをそぞくソゾクもとじてくさすす

源氏國朝ヨシノクニノタケト

かくまカクマにまくらマクラをしきねシキネすりぬヌリヌめくわムカハかに

カモハカモハリ

安東郡浦朝ヨシノクニノタケト

志定シテイの國クニもいそぎ我ガれガレに

左兵衛督實シマツ

令ヨリめはよし子コノシ年タメもわいし事モノとよみゆ

ぬ朝ヨシノハシノ原ハラよし

源ヨシ川カワ朝タケト

ほくわいすいあひそすむしむムシムシとよみゆ

堀河ヒロカワに際ハシの數カウ書シフ有アリよし

春官カツクニ大丈夫オトコ實シマツ

思モトわすれモテルし奥カミの志シれシう春カツ乃ノ下水シタマツ

ものへよる
支那の朝

年ぬれごとくもあらわせ我こいやわよのねに若のじとれ本
ゆきときへをかわいげりよも

よぐく

よどきじゆすくめ事よとくとけじ神よりおじくと
むろく内野よぬいとがりうづくはれ連く
まやみゆきの夜に届けうけし地にとれよも

金寧大貳長實

よもすう草乃花よとく處やあら里まくろあうす力多
ゑのくのじよもく 神祇伯仲

よどきじゆすくめ事よとくとけじ神をうて七歳のよとよやすと
野よのくめりけりいつることくじ地にうけ
人のうのうえ言もとくうとけ地にうけ

こつみ

ゆづりのゆづりきくゆづりとてよくふふよと
国信つの家の守方よめのひびよも

原後朝

よもよしきらく夜す枕みとアふものけよを
八月八日わゆくよくいすくろ所よこもよ
ものばをくめりけりとわかれよよそり

相模

わやうさわゆ風とどりそくひのよしのうせぬ
田畠はけうへんをくへけ は五月
すなまかと申せばひすなだ

橘季通

さうとかく落もくちてわやう草あやまくと育む
人のねとめりつけ

神祇祐郎仲

きくいはくはくはくはくはくはくはくはくはく
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

いづり うつみ

すくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
人をくはくはくはくはくはくはくはくはく

藤原惟規

はすじ我をかう乃うひをゆきふや人をくはく
女をとほわくはくはくはくはくはくはくはく
かくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
きくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

義重の家朝丸

竹はよ吹くよめみ鳥のいづくすやく

ましむらひをきりのわよしよ申され
まほありそれづれりつけ

後承有教母

まくく努力せずしてアモリテトヨシムホシト御公地
長實つ家の争合ト志ヘレバヤトモ免る

後承忠隆

まくくとも同の氣乃トクナセハ辛トモ名前トモアリ

後承光久

青官を支る實

白萬乃ラニ無事モ此の御代すうじうてアシ林モアリ
人をうそり

藤原惟親

鳩尾ヨモアリ浪アラフミテアキト御之のまゝモ
無名モモケル人の如は門アリけ

前承吉良也

わづやわづとよアキ名アハトシモトモマサシ
峰不遇高ミシカニシカニモトモア

左京右史經忠

一矢ヒリタリアリ行け乃向北アシニテ思ひアモアリ

後承家の家リムアモテ十首ノシテのよきを詠

けりヒツヒテあすといふ事ばよま

モ言ふとすをうきひも

皇后宮式部

音と聲は序
きことよせをやひ
きことよせをやひ

實の卿の家乃うかよ志のくへよも

源後賴朝

りこかくちよこすすわあよわざりやわゑ氣燒もとし
高の奇してよもよ 義家威通朝

持政左大臣

まぬま下りし苦のなとすけとほやくおばるよもよ
みいける人のれくにすりみうりうりうり

けり

白河女内越中

御よ乃あけりをゆこけりをじ思ひきてくわづかと
高のじやくとくとくけりよめら

律師實源

命とけみ限とあいとすすめと地とあれ

皇后宮義農

えみとみ種とめをうかの今じようすとひ

接宿吉久

持政左大臣

木とやあたまいが草丸とぬとくう様のすく

堀河に仰て數書ちりよし

皇后宮肥後

思ひ地よりみ見ぞる又月向は傳やま神の音と
皇后宮より人へ志の音いづゆりよし
おど書きよといふ事と

春濃

ふれども人の心だけよじすられぬか多きも章
人よ志乃うるすとゆけよ人よがり
す 挽改左大臣

寄ニヨ月立ふよも

藤原秀良

よしのまくほの人にこゝ月乃あつて入す氣すよ
其意よもうち より

志乃此ノ月をかくすと水浪の音と今うきや

雪居す乃哥乃人よがりて志の心

三官大進

よしのまくほの月をかくすと水浪の音と

寄たる

松風大進

よしのまくほの月をかくすと水浪の音と

百の奇に志の如く見え

情理を失形李

我はうきもとく書の乃うりれ也往々入るは
持取左大臣家にて志乃く所より入る

源雅光

やまとをうきしむあがいとくわ枝今も
寄ふ志こつまとよん

大中臣公長朝良

志院ゆきもとくの所によりく月日の月あわすト
いれなわけのむすめあすのをとそ

いづけ 美玉云敷

うきゆきせりくうつもすまくをまこと思ふ
持取左大臣家にて寄危立つまよ

源雅光

吹風ゆきと梢乃危すかう先よ、深すかよ
桔中納言後也卿家ゆきよ志うす人
主ひくよ雅不當迷つまよ

源兼朝良

かく草葉まよじすて房のよきよきうす
女を恨みうりうき

青宮奉支^ミ實

芦林^{アシ}水の下^{アシ}を思^メバ^ハアシ^ハ我^ガあ力^カけ也^ハ
重服^{モテナシ}すすり^{シテ}身^ヒ令^シ立^タて^ムゆ^ムト^シ
めかけれ^ハリ^リけ^リ

橘後宗女

立^タあ^ハき^マア^ハシ^マめ^ハア^ハシ^マ立^タめ^ハジ^カく^ムハ
立^タあ^ハき^マア^ハシ^マめ^ハア^ハシ^マ立^タめ^ハジ^カく^ムハ

前中官上總守官

石^シノ^シ尾^テの^シ水^ミ上^ア下^アア^ハモ^シキ^テリ^ハ志^シト^シ
皇后官女^{ヒメノミコト}引富

み乃^ミサ^シく^シ吉^{ヨシ}乃^シき^シト^シあ^ハハ
すすり^{シテ}身^ヒ令^シ立^タて^ムゆ^ムト^シ

金葉和詩集卷第八

志平下

初め志乃あらわとぞもる

良選は仰

良き也いふすく風土やうて考のえりて風をじて下
云にマ家より紅葉海橋立志此の事と
余よまとけつ。とうへゆつて人よも
だけまほすりけせこのひをかどりよもも

藤原範承朝

志わら人よもやねのととよちすらすゑの橋也

後朝志乃あらわとぞもる

源師後朝

志先の朝ゆくとぞもく風よくすやうとぞ
月増よごとすキをよもる

日人食

志乃あら
後朝志乃あらわとぞもく風よくすやうとぞ

後朝志乃あらわとぞもく風よくすやうとぞ

志穂よねよ月とれ敷母の枕えもくとくぬれ
鳥ゆき乃うすよこのいの志びとぞもる

後承仲實朝

よしとし御内へおれをもう風の櫻によがふ白雲
晚の空へつるぎをうたう

中納言雅宣

やまとを今更こ見り夕附日下のくわせへとほ
志乃くわゆまち 右近侍清伊通
お半身もよ水の教みれあますけいと成にけり
皇后官坐のみ人へと志のすくはりとひきす

今事大臣長寅

ちかくのゆきすくすゆるりにゆくゆのねら
志のくはりとひきすくはりとひきすくはりのねら
皇后官擢大丈師ホ

金瓦もさくべと氣乃う人注ハナツわせで草す今
かくはくと百とすりよすけ、よ便のくはりと

檀僧の承縁

やもしとみゆく人の山にゆわすすきくさ
意もさくさくさ 墓源寺師

くさくまもさくさくさとゆすとくじとよてとくさ
原参入家はくせよすけりきくすてく
川りけり 朝中官越後

久のわく譯水乃林ありうううううううう
後鳥羽の家はくと志乃哥ハシモト人ハシモトよ

けり。まちさうみふじつまとよやう

修理文部季

カシトシラタキアリ。衣うなよかに被ひ無れ。我をハナレモナカニシムトヘのモ。日暮
きつい。うけよ人トす。
ヒカヤカタシテ。ぬか。こう。有い。御さんとく。
郁芳門に根をよきのこしゆる。

周防内は

あらひ。すゆうじき。もや。我を。よの。煙を。し
人を。みく。五月五日。だい。うけ。

高井官河内

かま乃。き。し。うけ。わ。や。草。と。か。う。た。の。裏。ご。お。れ。

高乃。ひ。く。よ。え。と。太。事。今。貞。長。実。

は。く。き。と。か。う。と。事。方。の。裏。ご。お。れ。

高井官上總

え。の。く。ね。と。と。け。る。く。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

高乃。す。よ。み。け。所。り。よ。あ。と。

源後朝

と。草。上。け。れ。宿。を。よ。め。れ。島。の。よ。り。や。う。す。か。ま。

人。を。く。ま。と。あ。と。

よ。か。く。

今よりいかむといひうへりてその方へと來りけ
逢不遇會未だよもや

左吉馬皆實傳

思ひやわくや乃の御まほの間まほこのぬよど
金かなみけんのち例たとひやめりけんよ

さも

讀よ下しへ

ゆすとあそぶは生なま我わ今いま後あと人ひと

乃のわにりつけ

後承永寶

すとよかじゆああはかようじよえよきま

家乃のうきよ初はじ立たつ

中納言國信

えすゆらうりい前まへじれに後うしろえのうるせ

ももへ

よ下しす

わすい裏うらりわすりとととをすと人ひとがる

大納言經信

告おほ乃の隣隣ふくろくののかじりへへおけけや志し

義重忠達

そざれこわく深ふかくよしにがいふ東とうにま

金かなもまよひ

かねもまよひけん月つきとみくよひ

橋後宗女

いともまづやわらひとけ代ごよのうへ月のくわすよはと
しのまけ人のもへりとおもてせうかげ代り
りうけり
筋舟に肥後
やう
筋舟もろやうりとくわし久のちり代とよ
よのじゆうきうち
左兵衛皆實信
ウツモアがよりうるるよしとへよみよくわ
とよこたにほ島をよもげよそりくまわうり
うりけり後うるりやゑごみりふけりばす
よも
考古大史ニ實

郭さやしヰなふよあわしきわねう名あ乃としよれし
多あこつすとあら多京國通朝也
水舟みずふねノモヤシ白方のあとすとヨシ御ごよすとヨシの
多國たぐにごとく重おもをよひよれりヨシとよけり
すとあけ代月のわへとけりやよも
桔舟と記録
まい人まこと人ひとのうわらひ肩かたのうわらひ皮かわと新しんいと
寄大島おおしま志しと
わすとよとよわすとあ鴨かもの川かわかくとかくと
人ひとを恨うらみよとく
感かん絶ぜつ女めの

さうや、努力のうじに黒て人骨を恨むき
持取たる家より、志のこじよれ

源雅光

さうや、わらへ乃のものじよちうがけくわくち
うよみわくいじめくじ

さうや、わらへも

麻糸家甲斐

まみくは三輪のよもとをすこひ思ひすとく
わきれしもんかとくせり

桔後宗安

さうや、おとこし鳥木くとくすこひ思ひ出

皇后宮坐す山里あこひうすすまよさう

左京大丈經也

山里あそびけり、わざとくとてすけすも

山守ちよのこくとくら

讀入

玉子じゆよ、よ、まほらう、かまくらをうじに、山里

いえじかまくらのこくわく、鳥木よもとく
みゆきせり

中京章経

志家ちよあすと、のまほううれしかまく

伊賀内侍井 ひりつけ

本中納言貢仲井

よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ

ウ

伊賀内侍

よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ

源親房元

よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ
よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ
よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ
よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ

トモト

橋後宗女

いわくごとくあらわす月あつめと月あつめと見

ミテス

と總はほ

よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ
よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ
よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ
よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ

よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ

源縁は師

よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ

よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ

民部正義

よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ

よもやかのうへとじゆくともやうをすまけうふ

高尾

あそびでりけり

大納言経信

う事ばかりとあるを裏り、もとを今に年をあつた
うち所里の女房のよしんみをすくはして
まとひれども、多至形緑朝良

金持手かすててびつと色しづわへはめずめく

堀河川印は艶書うきぢよじよと

中納言後也

念ね思かぬ、ありて乃備風。浪のよるおはり翁

一官紀伊

や

音ひきくみて乃備風。浪のよるおはり翁
くねりうるはじとのよるおはり翁のぞり、
乃備風。よしやすよおはり翁のぞり

持取乳堀川

奥立御、金持手のよるおはり翁のぞり、乃備風。より、
いづれても人のぞりけりけり

江州

う事よりてゆきて行ひれども、よも思ひけりト
國信マ家すをよひ志のくふよだら

源通昌

まへと先と乃様の下トカラセヨリモちりとよ
雪乃朝に出候辨ツモトモアツアはアレ
されすもくつて候可シ

出候辨

まへと先と乃様の下トカラセヨリモちりとよ
雪乃朝に出候辨ツモトモアツアはアレ

大納言經言

まへと先と乃様の下トカラセヨリモちりとよ
雪乃朝に出候辨ツモトモアツアはアレ

前赤丸上文

まへと先と乃様の下トカラセヨリモちりとよ
雪乃朝に出候辨ツモトモアツアはアレ

讀人不知

人ノトカラセヨリモちりとよ
雪乃朝に出候辨ツモトモアツアはアレ

源後賴朝

人ノトカラセヨリモちりとよ
雪乃朝に出候辨ツモトモアツアはアレ

前赤丸上文

人ノトカラセヨリモちりとよ
雪乃朝に出候辨ツモトモアツアはアレ

もくやまく右川乃埋木乳タテ也事上記
わく乃シハシカヨモの由る事と
はアシヒナリ

もくシヤクシのホシナリサマガニシ
は朝志のレバ 亥未辰未朝志

ウニヨウヲ朝志かともシテヨリトニ
人のモトモカトシテ神也此ノ氣をモトモ
キシイリトナケルハナモア

皇后室ナ持

旅宿モシツシムシムモア

は理大史引季

キミシヤシモシモシモ接ナヘ山の傍に神也アヌニ
人乃タコシマシモシモシモシモシモシモ
キモシモシモシモシモシモシモシモシモ
モシモシモシモシモシモシモシモシモシモ

一官紀伊

秀吉承實

三日月のモトモシモシモシモシモシモシモシモシモ

周防りかまくらをうめて後りの

すれんすこすけ地にすえ

源信宗朝

わふよすくうじ地乃へと見るもみるよみ
お見ぬめりごづら半をよみ

左京人夫經

人れぬき名までごく夜かなは地半ばすくよ
人を恨てよみ

人半身浦ノ女

やまくらの月はうきよあひよし地とてよみ
三すむらまき人へと尋よけりよみ

僧都三句

ほくこもとし人鬼すじやられはとがくうじ地
うきよけせのむすむゆくしむこまけ地
こうキありのみまつうけはくは月夜のよつ
ときしてはけよ よりくよ

角氣の月夜の月夜もまくわくうきよ

左京人皆實

よせし名すよみ月夜もいてよりとまちよ

経子

讀人不記

わふよみの月夜もいふとみのくよみ

芦原乃のまくらにあはれむとす
ほの国をめぐるをあはれけむとす
遊にまよひて風にまかれてはりともに要ちの里
をさわぐよしやうかたわれすよよとまくせ下
そゆの馬のいきくわがてらむとまほと翁
こせしゆかげとまよまよてるじゆのまつたま
ゆゑまゆゑときまくはりとまほと翁
うとうとまく下にのしれはくのへけとこ見し
ちうぢとくとくのをやけせきとまほと翁
ゆまくらとくとくのをやけせきとまほと翁

ゆゑとくとくのをやけせきとまほと翁
きぬにあくよすもとくせりとまほと翁
ほまくらのいまい廣野とくわくとまほと翁
ゆすあえあらや乃枝郭とくとくとまほと翁
がほしとく乃下りとくせ木のよほれとまほと翁
守へいへいとくわきよとまほと翁
とくとくとくわきよのよほれとまほと翁
寄るよじよじよとまほと翁

高井だよ

かずさとくのれのりたまつやつわのうふまか那

持改左大臣家よりかのじゆよゑ

源雅光

教する事かばづ川乃もといれかとて高野
志哥シロトモハタケトモ遠不當イシナシ

中とて見えシテ 情理シヨウリ人丈ヒヂ季

立唐場タカニマツきり波ハタハタの立タチアヤマツトモ高タカい

意シテよみヨミ春官ヒノニシ人丈ヒヂ實

ゆまゆみユマユミ心ハコあたはすハサスちむかれ

形仲ヒヅキア女

ひづりヒヅリさよな小金コハタチとおとトオトてやとよといふほ

みそくミソクうらうらけくウラケクに大臣家ヒジンガ小大庭

タケリタケリわを痛ヒリいハリつけハセさハサけハセきハシめハシメわハハ君ヒムト
持改左大臣家ヒジンガよりヨリ阿アあアてテこコそソすスを

すえスエ 源助ヒラシ國クニ朝タケ

我ガ志シ乃ノ上アけケまマすスよヨおオかカくクきキせセを
高タカうウへヘよヨけケよヨうウえエを

源後ヒラシタ朝タケ

わガすスやヤこコよヨすス乃ノあアうウよヨきキとトまマごゴとトせセをヲ寄シ高タカ志シをヲえエる

源ヒラシ宗ムネ朝タケ

はくわしゆいにあはうとほまとううふれ

後毛卿家りくゑ乃うやうみよも

にやううみあすとづらまをよも

源後朝

わやよじせうけまやし

う乃くのまにづまじ

金葉和詩集卷第九

雜部上

し一遁方卿もくにゆりにぬりて安樂す
すぬりみけみきの梅の秋によま
りてみれい本乃す。いわく、
えふすかず所くよめうとぞよも

大納言経信

木垣よしわや、みゆ梅のむじとぞをよこすりけり
山家寫ごつまをよくいざくわけ

榜取大納言

山里トシノ内申をしむれは、各の官吏との事あく
國家も内申を仰うて、又後三昧だれすと
カリ出^トよまとめまづけ

三宗

極^ハきしらで、年^ハ危^ハ、我方の^ハ危^ハ、地
危^ハ、事^ハ危^ハ、女^ハの^ハ危^ハ、^ハアリ^ハ、

權僧^ハと^ハ縁

川^ハま^ハき^ハ、^ハか^ハ、^ハい^ハ、^ハき^ハ、^ハは^ハ、^ハ乃

日^ハ

イ^ハミ^ハト^ハア^ハ、^ハリ^ハカ^ハ、^ハカ^ハ、^ハア^ハ、^ハ危^ハ、^ハの^ハ事^ハ

大幸^ハリ^ハ、^ハか^ハ、^ハい^ハ、^ハけ^ハ、^ハア^ハ、^ハ危^ハ、^ハの^ハ事^ハ

け^ハ、^ハア^ハ、^ハ僧^ハ、^ハ行^ハ

ト^ハト^ハ、^ハ食^ハ、^ハか^ハ、^ハ居^ハ、^ハよ^ハ、^ハ入^ハ

堀^ハ、^ハ井^ハ、^ハ敵^ハ、^ハ上^ハ、^ハや^ハ、^ハア^ハ、^ハ危^ハ、^ハア^ハ、^ハよ^ハ

相^ハ裏^ハ

ヤ^ハ、^ハア^ハ、^ハ社^ハ、^ハア^ハ、^ハ行^ハ、^ハ立^ハ、^ハ入^ハ

ナ^ハ危^ハ、^ハけ^ハ、^ハ出^ハ、^ハ立^ハ

原^ハ宗^ハ朝^ハ

イ^ハト^ハ、^ハ城^ハ、^ハす^ハ、^ハよ^ハ、^ハ今^ハ、^ハ危^ハ、^ハ考^ハ、^ハも^ハに^ハす^ハ

山里^ハ、^ハ人^ハ、^ハ國^ハ、^ハ危^ハ、^ハよ^ハ、^ハ出^ハ、^ハ立^ハ

源宣信

まへうの所柄もかゝらず事方や若のじよを
後まにくればとかりやうむねのう
乃ちわたりも危をみくよる

右近侍曹奉事方左近侍

うにまとうは嘆きもこそよしとあはれ
にうめ乃じよよりにうやすすめ
の見えつけめりよゑ

藤原公仲朝

年あれこちよとせぬ増本花もよしとひる

老入やうよと餘はるの陪役ゆきけに
名中辨伊家ひだいか

多喜惟信朝

候もかくう乃もかくうせ様はうき
は家卿大事師おきわざもてめいをりうはのえ
香椎印祐こうゐいんすけはくわけにあそと乃
まく松原とやくく師のうと民
とよもえ
秋と大膳おと也

かやあくの内官秋の美うつくしきにれつ思おもひ
源心庄げんじやうにすりてちうりてよのうのうかみ

けりやとく所の事とぞ

はあら

良選は師

年を（めが）山陰（さんいん）に（なま）（めう）（り）（ち）（し）（れ）
藤原基清（とうげん きよきよ）（く）（へ）（り）（か）（く）（じ）（く）（れ）
やうけ地（じ）（の）（じ）（り）（り）（け）（ま）

多喜家總

かすと（みけ）（ひ）（と）（や）（す）（し）（て）（わ）（く）（ら）（慶）
一（お）（宮）（天）（と）（も）（に）（ま）（さ）（と）（ゆ）（き）（ま）（る）（日）（東）（乃）（ト）（佛）
（ま）（ま）（せ）（や）（け）（よ）（か）（こ）（と）（乃）（人）（て）（に）（吉）（よ）（風）
（ア）（ス）（ト）（ミ）（ケ）（よ）（ト）（モ）（カ）（ル）

源後頼朝

（ア）（シ）（ア）（花）（咲）（キ）（ア）（ス）（モ）（ハ）（セ）（ギ）（の）（め）（シ）（カ）（ケ）
田家元翁（でんか もんおう）（こ）（と）（く）（し）（く）（よ）（も）（る）

中納言基長

（ア）（シ）（ア）（ト）（西）（乃）（庵）（に）（む）（り）（を）（ア）（シ）（イ）（放）（よ）（ア）（シ）（キ）（シ）
（ニ）（和）（ち）（シ）（ム）（シ）（モ）（シ）（レ）（シ）（ム）（ア）（シ）（イ）（よ）（え）（キ）（シ）
（ア）（シ）（ア）（ト）（人）（乃）（庵）（レ）（シ）（ム）（ア）（シ）（イ）（カ）（ケ）（セ）（ム）
（ア）（シ）（ア）（ト）（シ）（カ）（ル）
三（ミ）

（ア）（シ）（ア）（ト）（え）（テ）（松）（ノ）（山）（行）（シ）（前）（川）（レ）（ア）（シ）（ウ）
（ア）（シ）（ア）（ト）（等）（乃）（也）（ヤ）（リ）（シ）（ム）

僧正以尊

草乃不と行方けし事も身も心もアレと神の靈り
良運は師をうしゆすわたりけんじつ。の
もまたくみゆくえぐくやくわけめがく
けりけりけりけりけりけりけりけりけり
信師慶範おもと

りりしき。 律師慶範
うちにいはけ。 と又何事にうちまわる
對し得用こどもをよめら

卷之三

二月より三月の間をのぞむと云ふ事にて
上家より有明の月を多くよみ

僧正行記

本居宣長の書簡
（明治2年）

平康貞女

えふみかと月乃やうすりひづれゆくすの
宇治原をぬるは月の哥よ
まきげに下れみる實郎のまことに

源師光

かうのふれいをとくに新はんせきのむら

僧都頼基ハシタケルとあわせて、

「け」
橘桔元

「よし」とよひて、「もくはす」と筆骨ヒツボクと云

み
僧都頼基

もくに西ヤマに月影カムイのく風ウラジロを吹フスてそ
郁芳アラタ門モリに伊勢イセにおりアリけケほめホメすと風
にうきけウキケすすが川カワをうきけウキケすよ

六條右大臣ミツツチヨウジンの方

やくようきのうきにすかにすまとすまうた
仲ハナの安皇后ヒカルとあつてぬりゆりけヒツヅクに

琴ハシタケルにさきをすみへとすらむしきを
りすまへむかはるしけシケをきてすまくを
えりやエリヤすまくをくふ

持原

琴ハシタケルもねノヘくはなすもせぬムシナシにまづいは

み

表農

うれくとも林ハシタケルのね凡ハシタケルのね、すくは
月ハシタケルのあつづけアツヅケよ人ハシタケルとくとまく

み

由多吉家ヒタキ姓後

琴ハシタケルもねノヘくはなすもせぬムシナシにまづいは

伊勢國乃二見浦にとよだる

大中津浦

かうとあみ乃へゆきよしもみやまねの村を
宇治筋古坂大門布引乃庵すよまつりゆめ
けよとよはりみよだる

人納吉經信

白毛ごすそにみれ吉澤乃へゆきよ庵と
よみ

えけこれやみれ乃まくらきよあじよ布引のき
選よゆ親とくじよわりようけはせむ

と乃まくらきよ庵のひてまくらきよけり
こゑくらきよ庵のひてまくらきよあくわくけり
こゑくらきよ庵のひてまくらきよあくわくけり
け

藤原惟規

赤垣父の元乃へゆきよあじとくらきよあけ
郁芳門代伊勢にかくまけははおま、お食
しむわくはくはくはくはくはくはくはくはく
うひ乃へゆのほのじきよあけれよだる

大原左木吉方

赤垣乃へゆきよあじとくらきよあけれよだる

高奇宮伊勢にカリキケは寮頭也
シテアマリ^{ナカ}の様この手乃にさへ
カミホトスニシモカツルテイマム
セラテツケマサヒヨリサカケムキム
スルリソリケム

高奇宮也

アシツササギテモルヘタ夜希モアレサカシム
和泉式部保昌にシテア丹後國又カケ
シテ都ニテ有乃カケム。小式部也
哥よアシテはミケル也幼ニ宣頼。

引の弓ニシマテアシムアリハアシモ行
舟乃アヘ門ノリテシヤリシマテシ
ヤハシヘシカシモスシカシミリシヒ
ミケルをシテシカシモス

小式部也

大江ノ野道のシケ代ニシモアシモ天弓立
百首尋乃中に更のシケトモス

修羅大丈弘季

アシツササギアリシノ人をスルマサヤ
百首尋乃中のシケトモス

高奇宮也

泰衡師頼

まことに思ひうみちのくわきア沿あ候神入り
シテ馬撰（け）ムニテハ云々武てとくらじてよも

支那尼浦朝丸

家の風吹（風吹）あらか（ら）ハトモの書（書）をちどりとす
潮陽
キテレアモルヒテ乃うとの（の）波ナカツケ
にキシソヤビスリ（波）シテモキモシテ

サノモリヒリシカモ

平康貞女

うきし入江を空（空）アモクマテの命（命）トス

ヒタチ

あるすまもま原アワトモチニ神の（）ヒトモ有脚
和束（和束）モ都石（都石）ム田ツカケ（田カケ）大津（大津）ヒトヌ足
セキケムキテ御（御）レハ人（人）のけツ（けツ）ハムヒテ
ノアケ（アケ）ハルケ（ハルケ）シテハマ（マ）のホリ（ホリ）のサツ
タクシテキテキトキテキテキテヨ
タク

和束

毛乃ウチ松原アモクシタケヒテヨシモア
サカナ時房（サカナ時房）
ラ實アモモヒニ田ツカケ（田カケ）ムシテヒトモ
タレヒ居ヒキテアハジム小ちニシカニ

うるひよこれいわやりこゑせて、うらり
か乃郎ゆかりてらとそりゆけは房まえ
まくさむいこせけせ、もくまくみだのれ
ううこくくとくとくよりうりゆをい
ゆきよじけふいりけり

藤原時房

わにまきこしもぎつて、あじよかくほ
かく、のよすりみゆかく、かくはく
れははんよよくすりよけまよしよ
みすみけはんよ、もうてよみ

春官人史の實

きく名うそ人行くまき生みれに、方ばく眼
大貢資通^{まよ}ゆくのまけを極^{とく}とく
うかこのまされよみ

相摸

いたくと國よ、^よ坂井^{さかい}のまじくらき
肥後^{ひご}のくわくに、^{くわく}ゆくゆくまけふけく
内^{うち}ゆくとよまく行け

堀切花脚製

ひきぬけてくねとくに、^{くに}わゆの上^うに、^うに

水車をさすよも 僧をひる

早とよそむかへりわう水車かくらむとあくらむ地
きくかく無事ありまやつてはくらむ比上まつ
たに拂ふみてまじらして人ようとてすむ

堀河を今

いりほき自身の運が下れあれどすあいかとけ下

上東門

すまやくは日乃すとまくせつこのみすと金を下
僧を引ひまくとまみとうぬとてりとえ
ゆけりて獨鉢をとひしきみだりとれ

こてよまく 大納言宗彌

草むらとそい後乃こかめはくとかもとゆす下
たとくらうりゆまくとす脚引け後ま
ゆけりゆくとをさうとととととととととととと
ととととととととととととととととととととと

櫻井尾

乃とくらうのととととととととととととととと
後冷泉乃乃向近江國より白鳥とす
ゆけりとくして人よとととととととととととと
れお原とちやんとすれいをの

よまくなれそとくよまくそんとみそ
かとすめかけせじりつまりれ

サ持日は

きくさとがくふ島むらわいす誰つせ
甲斐國すう乃下とてかしづのゆにあ
けやけられおまきゆくのひのまわう
ごまきいづらわれよえ、

よみくす

島乃よのまくさとあともいおりそあはれえ
百尋平乃ゆうじよ家とよめ

博理大丈那季

蝶乃おうわすまの戸、人見すすゆとくもす

藤原仲實朝

年あせひかくすこにきくあを草のくも思ひけり
殿とかてけりあら人の殿上へひととお
てよめく

源行宗朝

かくすこにゆくよ地あられよめく
殿とかけにゆくよ地あられよめく

平忠盛朝

よしよやモサノ月をよしよしよしよ

かくはけ人乃れくにあ足されそ
と人より多くはくゆふと取方をよじ
けりもてやと乃とすうゆふるよ
すをすきけせばいりうけ

山人屋家小追

カのアシモジムキタヒツ地り、何の通じあうね
れとアカハリヨウヘキミヤレ
トカケムセトノ男ぬづきあいわれ
ミリテコノ乃はとのぐるりせよ
くまでみつヤアテヌの日うろすくま

りのの身ノアガトノヌムトスルト
トキトヒリウツラケ地、よえ
よ人トヒ

源頼家望
源頼家のもの申す人の本節と出で候
けりもてはくとロアカシムトボキ
衣とあわのくわうなうよとす
りりゆけ地、にすえ

源克緑母

日影ひかげ
日影ひかげまき衣きぬとすもととくの翁

経信卿よくへりくよはすけ此肥後守

盛房野釣のよさありもとめずて

えれいとあそび旅宿地て三歳ゆきよ

けぬよ先

源後朝ト

まけよけいふらわやとるにゆま

三歳ゆ

大年乃神仙といふ所よりてくほけぬ向

行ことみゆきあひてぬわよけぬいほ

よよ先

僧むひさ

や人神

かようしのとくとくの儀をわま

まけよけいふ人のよてくわわむと

それよ先

讀ノ子

とかくよしよみきよ種よくう梅に歲

けい

堀河虎中官乃女房うちを亮仲實

紀伊ち里外ゆけふ若庸みをみて

れあまくはわけるよまつてけりけ

若中官里斐

人すよくわきよてえいわ乃くみがす

保實卿

ほじきよく様のく所

いわくけくみをくとけれいに

を申けと聞てやう

藤原實信母

そりやくあれども生す鏡(アリヤ)郭(カイ)多すかう
月(ツキ)へとみゆきをう

源師賢朝

西(アリ)ひづれわとのびをむすうしの月
為仲朝(サキマサヒル)は清興守(シラスヒサムツ)月(ツキ)は延(ヨリ)有
こきて(アリ)りけ

黄原隆資

ま(ク)我(ガ)裏(アザカ)年(ハ)年(ハ)成(ム)成(ム)く月(ツキ)に

ま(ク)人(ヒト)の春(ハ)日(ヒル)にま(ク)て庶(アリ)り
よ(ク)申(メ)け(ス)ば(タ)ま(ク)よ(ク)う

藤原實充朝

三室(ミツムロ)乃(アリ)のうちも(アリ)あ(リ)け(ス)す(アリ)
屏風(カイボウ)の(アリ)す(アリ)や(アリ)へ(アリ)り
う(アリ)け(ス)所(アリ)と(アリ)

安原家経朝

入(アリ)て(アリ)り(アリ)あ(リ)す(アリ)と(アリ)猿(アマ)の(アリ)を
申(メ)す
よ(ク)入(アリ)す
カ(アリ)を思(アリ)い(アリ)の(アリ)ほ(アリ)無(アリ)事(アリ)

皇后宮羨農

よもくせとくまつ乃くわか月乃りとまわがおす下
上陽人吉寃多サ思若也亦若吉こいつを

よ先アシ

源雅光

肯トモわゆすム承ムけとけのミ社面モロコシうきム
青宣畫肩シ細長シテ中キをよめ

源後賴朝

秀ヒカルかカあるはハいぬムくムうムをム下ム
ウうウうウはハりリわルてム野ムくム
キくク下ムけケをム被家鄉ハタチヨウありム

驗鏡

けクよムまハにハとトやハとトてムこムわ
やケやケれレうムぞムいム見ム見ムてムこムまム
僧ムいム入ムすムとのトのトにハとトしムわム
かクへクるムこムけムよムすムにムりムるム

僧ムむム

金キとトくム捨ム、扇キりク乃ハすムもム人ハとム此ム是ム
大タ中ヒ浦マツシ多タ也ハ、ムうムけム此ム是ム
主ムをムよムとトをト神官ムサシとトしてム御ム
めムあムけム此ムのト養ムにムよムみムすム思ム人ム
主ムをムよムけム乎ム

草乃へまきひくとす處の方をま前まく歎うつれ

六あたる處のあま乃家にくとていじよとほり

みやこくわうとみよもと申うけめよも

那稚卿母

か年まですんじ渠乃庵まこと熱ゆくとく見ゆよとし
宇治平等院の見じたうて宇治ますよとよ

て毛毛乃よれとみえやうてよさ

也快は仰

うち川乃うのそくいこまとうむもうすすき
家とへよじよちく走りごとねむれんつま

はとけ

周防内侍

従ひておまわ乃まつ草上りふとしげうやモト
賀茂成助と初めあひてと乃まけりとが
よがりけうてと先

清守国基

さくわくみゆしけの本清とおなじくすみよ

賀茂成助

従翁乃まうしわうてとすり、うりのまとと符

皇后宮弘徽殿モカリナリけ、比後頼す

西のほてご乃り、すまうへよゆけ

よき運ゆきまほくわけれまちよかと
けくべくめのとくをやこめのとれ
うそうかあれてゆせうこすときてよ

皇后宮太貞

石ありみあけりとくの山も又すゆ。こ思ひり下
太原の蓮聖へ、とてへ小うきにふすみて
よゑ、
天台庄主に覺
われどもあまたもあればどくじゆのとくとも
百も三千中は迷懐のじゆよ矣。

源後賴朝

せ中うるかうら新されや是れもいれどもはあが
やもこよしむて越后國にぬわくわけに
黙つてすくにゆよらくぬすれれははくす
かや乃むとへりりりき
よみぐれ
かきほじぐのいわくちくやく様すと
り
かや
是やうふとくとくとれあらんよかのうよ
かよまけゆまろ

參議師賴

まひる 遇る月日とすれしを思ふか紙
みをちくはれりとすてよま

源師賢朝

かわらの水の影をすくは、かげ下りの歌とす
前後大吉乃家より正りも女をゆむ患宗
朝臣アマサ侍郎國アマサにしゆくにゆけりと
と家アマサあいのう乃様アマサとくと死
うござすみ女のうそりり

源矩國朝

こゆき乃いうすあくとく浪よひにあくほ

義人親隆アキラカとすりて又乃日アキラカと
藤原アキラカ教遊

もろよめすやくわくのゆくにやうる傳
堀河アキラカ源後重アキラカと郡並アキラカと
ようアキラカ頼轉重資アキラカとくにり

源後頼朝

是いわゆるよきのくよも我方アキラカとぞ
是をアキラカけれども國防アキラカとすててれ
つらとせすわざれり

源師賢朝

周防アキラカ

ありつらりとあわへにやがてあけよ新
やのうすうげと
毛のまくら

全集和詩集卷第十

雜部下

三實卿、されば是之後、乃家よまたゆち
をもす梅危らうづきはひさみ枝もし
そりげくかげく哥

藤原基後

首ややアレトモ拂えてもよ我ぬるをよ

や
中納言実利

神ノ危乃す、矢くいづるゆと形
人ノももくすもみゆうてのアテ

後風がうちずあくめりけよくうかむえ
けふ人のむとよりすまにゆき尋えむか
免けりりく 平基ち思
様か(アリ)自考すてもよわざふよちうせ(アリ)
後三重院がぐれかりよて後又月日一ふ
官の内帳日じうあうとけつよ様のいふ
危ううれづかをうそすくよ先

美玉有詔勅

あやめ草はなみくさよ中にわづつもさく
小方(アシ)とゆアシ(アシ)天(アシ)とすよ風(アシ)いわげ(アシ)ち

日くよる
おほね右大臣

あやめはなみくさのわづみくされひてもゆゑあせとす
郁芳(アシ)天(アシ)とすよ風(アシ)いわげ(アシ)ち
志(アシ)隠(アシ)わく(アシ)け

康貢王母

うわく(アシ)林(アシ)よき思(アシ)とく(アシ)も(アシ)考(アシ)ち(アシ)

藤原志隱

ち(アシ)あ(アシ)の放(アシ)と(アシ)鳴(アシ)ま(アシ)わ(アシ)放(アシ)の遠(アシ)く(アシ)放(アシ)く(アシ)
下鷹(アシ)こえ(アシ)せ(アシ)て(アシ)歌(アシ)は(アシ)け(アシ)ん(アシ)

源後軒朝

えりのれ風乃けしやくあらうす草、おみや筆
侍師實源（しめじ 實源）のせいかれぬ事席に佛供養
えきてよとゆけりぬりてかはりと
よすをちゆきをそくいとくい
うくやまけむ道よもせのゆら
あせらけつきぬく（まことのてあ
ぞき出ゆけれハ後僧（ごそう）てうまと
てあれうど乃ものうりよれり入り
けりう

讀入

玉しきけけこよちかとす（あじやあやあ）
と読

大略すふをとす（は）けりくよ
けりけんりけり

かよ

（阿房）あらむかわけまや（あらくわきや）

あらのちか總（まつ）くれ（が）けりくよ

あらけり人のゆうれり（アラケリ）

けりけり

又互知信母（おひしん）（信）

あれて（あ）とゆけまやけき（わ）とけ（とけ）
（ち）く（よ）か（よ）かけ（ひ）（の）（よ）（よ）（よ）
（よ）（よ）（よ）（よ）（よ）（よ）（よ）（よ）

讀入

く行乃事とすとあらゆるの事もう、書ひよみをか

乾元朝に生家へゆきて精舎あるて

ちけむとくみよわいりりけ

藤原通家朝

よきよくよばうし、ゆきこにうち乃もおはす
律師長所（とも）かまうしてねぬのうめあいと
してありけよの音とみけり
めらか乃歌（うた）をりて我（が）くその下にすすきよ
形仲卿（ひづる）やまとをくれてかけふせけ比
ほつてみこといふすとてよめ

大意卿追房

うの音をさりかけやぬきてゆきゆきてとさよのう
極三後藤原賢（かずか）すれいすれもあひてよめ
いほくくちけよ人のすとよいよみ
ごいてふまんれいよめ

後玉賢

うの音をさりかけやぬきてゆきゆきてとさよのう
力ぬきてよめくよじゆくとまに

えよめう

權僧と承縁

君のよしノアとあひていしゆくとまに承縁

今じよんのよへぬわくわけりに
やさしくてあしらひは書く
て力取るにける所

讀人不知

あの方のすとけてお裏草方をうつてあくびも
小式部曰ひ下きてね上更門だよりうつ
やかげきをあくびあくび。ノーメリ
けふ小式部曰ひ下よりれりれりとあく
あくび。 わかま式部
あくびに下よくらすてうけれぬ名をすてよ

きくとくへふとくれふつこのとくとく
ゆけよよもうち 平忠盛朝良

まことひ思ひ黒牛のゆきよのゆきよめり
陽明門だくれかりよて後門つるの事
黒牛のゆきよもくらひよけりゆきよめり

文京賀信

きくとくよくとくとくとくとくとくとくとく
白けたのゆきよくれよてのひか乃家の南面
あくびのゆきよくさきりとくとくとくとくとく

僧心経

草木まで見けずともあらねど身のありかを

萬房朝重服よりてこもわやくはげ

止辨りよひゆりめりひとせ

ひきよみけれまを

擣え仕

乃文書のありづまへり
乾國朝にて伊勢國の國守とあつて
正月より三月までいとゑ乃あらあ
ありうちとめすり又乃とみけれど
あるがわせれい守候事とよもく一官と

みとみゑのれに申しれまそりて游走

けむ

候用は師

天け萬代火よ見るを天降まし休かまし休
休感ゆす大歎ありて三日三夜やまと
家集まつめ

心経信奉してう乃ひてくよもとゆ

持取た夫

きもとしよこけましれいのよくあらわれ
はえ乃あけびよしちもめ序下すよま

すすましとてのてあらまえよも

かに中ゆけりてほのまてとよもせむ

三官

やまとにやまもくとへふととてよとよとくとくとく

月乃うつてけむる瞻西上人の

け 僧むらさ

まよだむも乃くふとめのじとせすをねの月

まくまくわたりけりいとおこちう

けくくほう

源氏宗朝

いたるよ中よみの黒い煙こすりてす

實乾聖へよむこよりわぬとく

静嚴師

くはとくじてけりとくじとくじとくじとくじ

金

月のうとけりあらわら房聖代

とくけりあらわら房

うとけりあらわら房

燐すれ親王

ゆきゆきうすすまくとく西へうすく月とく

法華經義釋迦遺教金門殊宅ざんし本をすめ

け

皇后宮肥後

うとくへづ月のうとくつくわくとくとく

清海と人後生を徳をうと思ふがゆくとへ
けよれみよ僧乃立てよけうう
かほりちて凡の吹きうちうかめくは
普賢十願の又玉取義は欲令法はい
文より
覺樹師

命をいきもかのきと公に有りて是も消しき
衆罪如霜露ごつて文をよれ
覺譽師

吹きゆや乃前あつをいわものうひをすりや
捉はゆ乃じとよれ
僧正辭句

贍西上人

ほの弓矢一新いとよとてやうよくよくうき黒
龍女成はよま勝起師
ひゆるをのくいごくやがいとよく月こす

涌出穴とよも
拉僧正承湯

みちのうとあるといふれにあらまきよひを

不軽足のひより 賀雅は師

わがよしをもつて程じうぢやへと道ひゆけ

薬王のひより 懐翁は師

心力がゆすじきけ、あま小舟とどけぬ日もよ
人のむきて経くやしける五百かよ後記
脣乃くべ説けよ繫寶珠のむれゆうご
けりうきよくしけよよしすひつま
すよあけとみくらによひけよ

行僧の永録

いふくめ夜金ひよとゆふむれいとを無くあ
依他乃へのゆくとくとよひよ此方推摩
如幻ごつて事をよえろ

懐翁は師

りきりもよひ事くきうのけうのよび良
常徳の序論こいつらべよえろ

證成は師

よもじの内中よし房とやくよもじもく続
松雲をよすよとよす本を

源氏頼朝

「もはゆれ浪しめよきくいとすのめに」
醍醐乃吉利會同もてちよみくよえ

林ゆき印母

「もはゆれ浪しめよきくいとすのめに」

地樹の繪絵ト鈎つる乃えよへ可かぬれと

子こよえよ

右泉式部

「もはゆれ浪しめよきくいとすのめに」
やくやくすの枝のめじよけの力ちからをだ
ハクセキはけけよ樹木にゆくやくくてうと
をくしけれよきみのわくよたれれれれれれ
ちくしけれけよ霧きりのあよよほほほほ

「もはゆれ浪しめよきくいとすのめに」

田口重如

「もはゆれ浪しめよきくいとすのめに」

かくしていせよもぢりよしてよえよ

「もはゆれ浪しめよきくいとすのめに」

障さくよ多た天あまとも乃西門せいもんやよもよもは師しのゆ

のりてりよゑよきよきよあれていよくよぎよ

子こよえよ

源後朝さち

「もはゆれ浪しめよきくいとすのめに」

弓院

連評

やうりけ所乃きのつよしとあまわら
人のよのじけをきこむ

永成侍師

わりまかとて争をきこひかれ

律師慶乾

ちろくより一もアア

桃のむとて 頼行^度侍

きうのむともとさよひれ

三資朝長

梅^木乃じとそちりやよし

賀^木の^{ササ}にわづくゆつ^{ササ}にひびき

神主威助

あめのうらにまねくとととあざれ

糸重

いづもれ乃いくにわづく

宇治^木の田の中^{ササ}をもうち男乃^{ササ}わづく

をみみ

僧^木原賞

春乃^木すみへておきる^{ササ}那

宇治入道^木左義^木

か乃水かのみによもぎいれどや

日のへとすく観置は師

日のりくわすよとせうけれ

平を成

あすすまことかむけられ

田中に馬乃まのすうとみみ

永源は師

田もじまくわすよとせうけ

永成は師

かうか乃水にいひこすり地

かくやとてよ人ひとれ

かくや乃板ばんよとみゆうト

助成すけ

りうちれてやほくうう今

まの乃鳴めいをみて

高助

見ゆくめてもか乃のま小

國忠

望らう乃日のりくわすよとくわて

宇治うじへゆづけみくうて日走るが、アラハ

水の山さん賀戸川かどがをすくのけよとおふ

あよきけりやつてきゆく

頼繼朝良

かの川をくらうりくとアリト

信綱

かやくよがいやこかわい

あゆびすて
讀人不知

あさわやをらむと

ほ房卿のじょうの娘

うみにいさくいせんのゆかほりる

和泉守部かとうの風かぜうきよつう

あをくへれてとをゆれめかひと

神主忠頼

あらやあらみをいあはまくと乃

和泉守部

いあそーと乃社やしろと

源頼光、但馬たじまもすみ乃のすけは館やかた

の京きょうにさく川かわとく川かわあくとよちみ

くとけりくわ部かべわくとよ

もせりくよてこすとのうてようす

こりをくわくわにじてよどす

源頼光勅

きてるか乃とくふすりけま
れを連すよきふして

相模母

あまきわみのきこや

危くちうそをうりけよ

ドウイハ

前後食家本綿口年

ばらまくじまうりけよ

すまく草のやうりけよ

うてましけよ

讀人

むよいあまく草小る

うとういちふくじもれ

鳥がおひづれに足りやつよとあはれ

けうそぞう

まれさとよあひよけよ

かうふうつねまや

表のじやのひよめう枝よあひ

子

徳仰慶

梅乃ともとさくらの山

まつまつやと乃にすれ

ぬよかとれゆくゆつかよし

うね水にうづとみゆ

頼義は師

わくうみみれごくうさわる

よづくへ

さもそそいちこのゆうりよ

まめ乃ものよみぬうちひきをみす

讀人不知

とよきとよすり滝乃へ

むかひとよくとよみと

かくすゆとよくとよみ

觀瀧

みつともゆくとよみとよみとよち

せなよとよみとよみとよみて美に

めやふとよみとよみとよみとよみとよ

うううよとよみとよみとよみとよ

源後頼朝

ひとよみとよ

此集依勅命以瑞草用捨之手寫之數及後卷凡

于時文明才十曆孟夏中旬

征二位藤原教圓

此學之草一稿ノ件草一物隨言先知望少也

延喜七年十二月九日

特進源家



